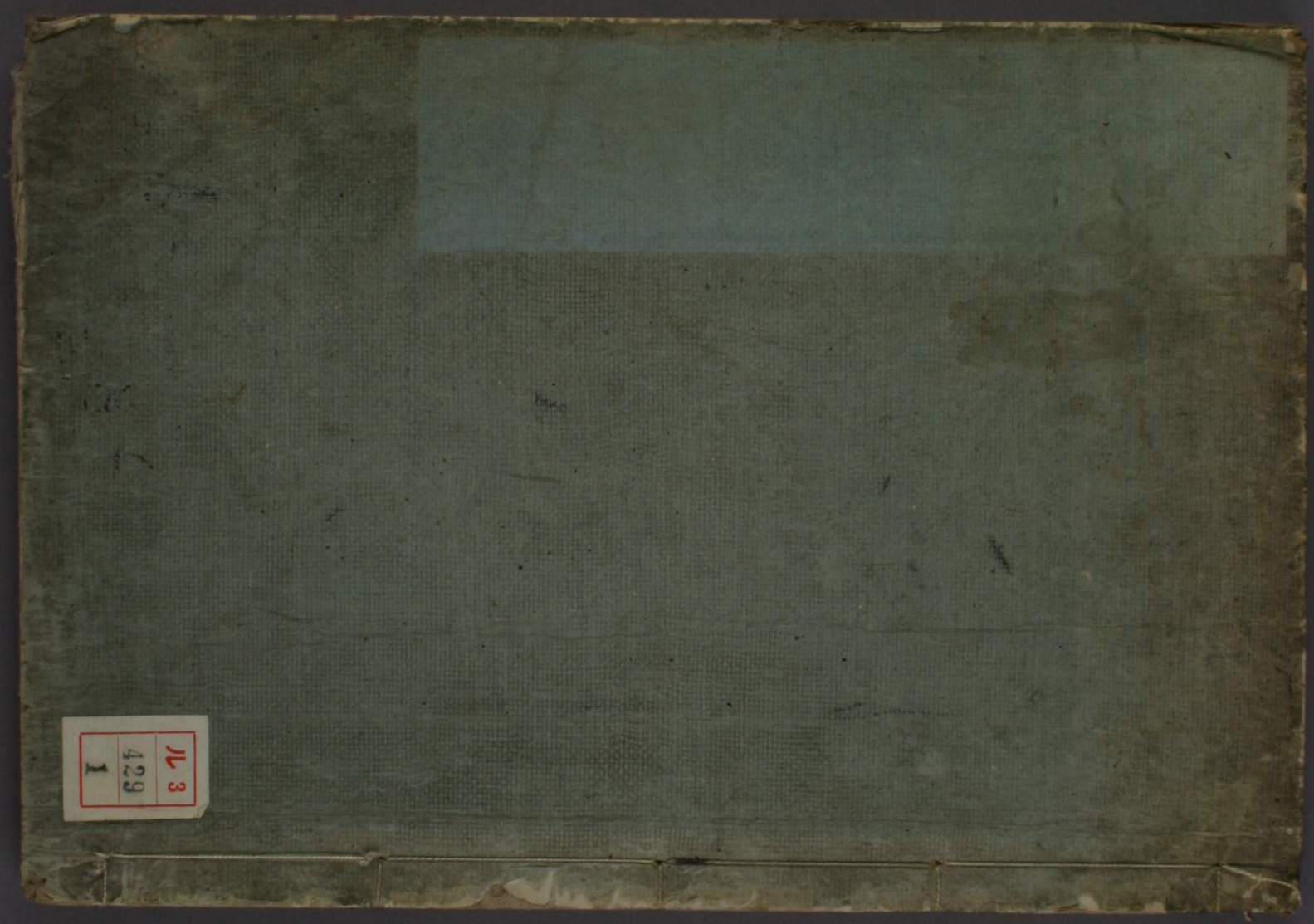

KODAK Color Control Patches
Kodak
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black

JL 3
429
1

北3
429
1

大扶桑國考序

大慤年先生奉
帝道惟一之皇誥學顯幽分二之
神道而其器環朗其識英逸奎
筆如水著書如丘議論拔山精
純淘金固不待隆明等之贊也

奉聽敕

東叡山大王之奉覲而眷顧有
年篇若夫古史及徵靈眞柱等
數部注年既因豊田少進而獻
諸府內
大王感賞特有恩賜邇者大扶桑

國考及三五本國考二部繕寫
己成使隆明復獻之
大王照覽數日從容謂隆明曰方
今古學大振俊士崛興然未嘗
聞有探彼外邦之載籍而明我
神州之典教者也今也乃有此

撰哉。可謂足治末學之舊弊。為後進之木鐸矣。吾將更以一部。備於

傳洞乙夜之御覽焉。隆明謹而承

慈旨。乃退以傳諸先生。先生率爾。且喜且泣曰。嗚呼。蓋羌之談。庸

失之。恐。誠無徒棄焉。而久辱眷顧。更奉恩教。何奉加焉。與為我道。誌其敎旨。以為之序。隆明唯二。不敢以不敏辭焉。剞劂方成。於是乎筆此事。以冠其首云。

天保七年歳次丙申仲冬癸巳

東叡府臣　進藤隆明謹識

氣吹舍門人　脇田信親謹書

大扶桑國考序

高山ゝ登て見度(ワタシ)する事。人ゝみな〻ろぐ〻て。國原海原おほ〻〻こゝ見放て。ゐぐ英見度の住(ヨキ)をもとめ愛(ヒ)て。歌よみ文ほ〻ふ〻ふ〻ふ〻ぶこゝろ。又〻その嵩かゝこの島とゝゐみやゝゝ見分(ワキ)さだめて。遠き近きをも測りむこの陸ゆき海ゆく。ちるべゐ。ゐげき拔もゝとゝる有已。

同じ見度に。其見る人一の様なたゞならぬ
有りふこと譬いふべきこと有るよりて先いふふ
ところふ氣吹屋の平田吾兄識高く学博きハ。
其まゝぞうかむ書。まさやうなる論書。
こゝらに巻こ皆人の見知ぬところなれど。
今さらに言挙せじ。然るを乃考論。奇
幽なる技さぐる。妙に顕なる技きわめて。世人の

思慮に外に出る事ども多よりて。ほやゝ
いぶかしぬ人を有ども。いで是を彼高山の見
度よりと言む。平田吾兄の見度ハ。普通の
みるこゝふを。ひとしびとをとりまぐれる利眼
なるうへに選とえらぶ。磨とみがける遠鏡をさへ
取そへ。天そらは高峰の絶頂に立て。日経日緯。四
方八方遍く見さけ見ほゝ。潮の八百重乃

澳津島に向伏雲よさゝ原國におつる方遠く
殘るくまなく見分き見さぐめん其島まで
何木生ゝも波國所ハ何人住よそゝ近く
かゝゝゝ遠くとまつぐらまさやゝふ千里の
外を眼前に如ときまつあゝ言さゝ原ふと
彼おほゝゝ驚ふ人ゝた近をさゝ意とあぬ
まゝて遥く思もよらるバ何ぐ驚めゝして怪ぶ

ゑゝ又ゝ何やゝ所見ゝ原人ゝたぶゝ遠ゝを各ゝ
眼のきゝみ見及ゝ其あほゝたりぐゝを
測かむゝ知てあれバ今吾兄のゝべを寔所
さゝ有べゝおもむ計ゝふゝ何ぐゝたざり名ゝと
喜ぐゝぐまゝ或ハ其ゝゝさ原彼方に依て
此方を定むゝ何づきゝゝつかれゝ法きゝゝれに
よりてゝ大功績（キイサヲ）を賞感（メデカヤ）まあむゝゝゝ物ゝ

直眼（タヾメ）と遠鏡との間は思ひまて。そ〳〵後（ノチ）こそ
まさかしきなり。鏡乃善悪をえらびとり
磨くべきなり。知（ラ）ざるは新奇（メヅラシ）き
方よりこそよきなれ。彼此（ヲチコチ）を人見るべ
きぞ。はて海ゆき陸ゆく本つ道をも。
いやまちもせむとぞ。遠き慮りいやぶも
えもとぞ。おのれ力なく足弱くて。いまだ阪中（ヲノヘ）よだふ

至らぬさんど時ありて峯上（ヲノヘ）は登得（ノボリエ）ることも
ありはたらと見てしばらくもたてしばらくおもふ
とかゝ後て思ひのまゝくる事ありのやしくも吾兄
ありたるとしと同じ事なるよ。其言きくよりろ
打ありぬ。其書みるふ思ふ物もて。麓ふるゝり。
やすき峯上るもかけといくりて共は見度し。
遠鏡をとかゝ見るこちして。うれしくも

樂しくそあぼゆるまゝに。板本(スリ一キ)なれるをさゝふを言ひまゝ稿本(レタガキ)まゝて全くぬとゝもこゝに出見つゝ。このそれ利眼をゝ。ほまゝ男子。大き見ゝこゝかくゝそこのれふどゝやゝゝほゝ。此度それの大扶桑國考板本よりふゝ。序文(ハレブミ)そへよとゝいひあゝされゝゝをぞ。ぬきあのき城。靈あるゝほ学の兄弟とかゝぞまゝられゝる事のうれしきよ。拙きも思ひぞて。いそ此考ゝ妙よ奇しく。仰ぎ信(ヨル)べきよゝ城。ぬやある序文ゝくりてと。其詞おゝゝ同らゝとして思々くく。さゝもこのゝぬ人の。一巻二巻を。力ゝこのぎりよ著(レ)出るゝむよゝそ。其をほあゝゝてどゝやゝゝる序文をも添ゝ。吾兄のうへすてハ何ぞゝの態ゝをこのゝび。本論(モトツフミ)あゝての別記(ソヘブミ)なる城。そゝ

ゐぬくいひ〳〵て。拙き詞ふまぢむりてはやどり。
書まぎら〳〵ゐもと。必吾兄の意まもられ
たゞ。ゆゑ。序詞(ハレブミゴト)とも。はゞ有ッとも。ゐぬ。はゞふ
おのれが思ひ。ゐるもをとゝと。かく〳〵
しき長言を。書はぐけるりまふ。

天保七年八月　伊勢　大神安守

大扶桑國考上卷

大壑　平篤胤撰述

備前國　業合大枝　門人
遠江國　關武雄　同
上總國　大高秀明　校

諸越(モロコシ)の古書(フルキフミ)ぞも。殘閲(ケミ)ゆ。其國の古傳說ふ。東方大荒外ふ。扶桑國と稱(イ)ふる神眞の靈域。君師ゐ本國ゐ。その國初ふ出興せし。三皇五帝ゐど云ふは。謂(イハ)ゆ。扶桑國よゆ出て。万邦の道を開(ヒラ)ゐる趣(サマ)ふ聞(キコ)ゆる。採(ト)集(アツ)ゐて熟(ツバラ)ふ稽(カンガ)ふ。其扶桑國とも謂(イ)ゆ。畏(カシコ)きや吾が天皇命(スメラミコト)ゐ。神形(カム)ぐら知食(シロシメ)ふ。皇大御國(スメラオホミクニ)ゐ事ふして。其三皇五帝と聞(キコ)えし

は。我が皇神等が那も御坐しる所。其を固よりて然るべき道理あるを。今それ由緒を述て。あかも天照坐大御神の。本於御國の大御光を輝さむと爲るが。既く此方れ古人さち。其扶桑と云ふ找。皇國の漢名を爲して。詩賦文章の類ふも往往用ひ。それ三代実録・清和天皇紀・僧宗睿が傳れ文了・八年到明州望鎮海適遇李延年遙指扶桑將泛一葉宗睿同舟解纜歸著本朝天慶六年の日本紀竟宴哥橘朝臣直幹れ序ま聖上纂統天下無為扶桑之域歸仁細柳之鄉慕化云云あど言へて。尚古き詩文れ集等を見て知べし。但し日向風土記ま大足彦天皇之世幸兒湯之郡遊於丹裳之小野謂左右曰此国地形直向日向と詔ひしかを。かく文詞せるあり。其は宜号日向也と有る。此国地形直向日向と詔ひしかを。かく文詞せるあり。其は宜号日向と云ふて。ちう聞えさて。然れど此は扶桑を皇国の名と爲さる例とも異なり。思ひ錯ふ。ら。ま〻歌文れ集紀事の書れ名ふも負せる所。近世の學者ふちは。其

を非と論て所も許多あて。然れど此も古人れ皇國了當さ所が實ふ叶ひて。其を非と云へる後人の論ぞ。却て非ふも有りる。扶桑ま皇國ふ當さ所書名は。紀齊名朝臣の扶桑集。藤原長清朝臣の夫木和歌集。皇圓法師が扶桑略記。水戸殿れ扶桑拾葉集あど是ぞて。中ふも夫木集も。それ奥書ま。見えて。扶桑集と名けよ。大江匡房卿の雲撰者の夢ふ語て。しうば。扶桑も日本国の総名ふれむ。懶あて。扶字れ於くり。桑字の木ま取りて。夫木集と名けらるよと有しふ從ま。黄門為相卿了る由見え。下学集ま。扶桑国ハ日本。摠名也。朝暾必昇於若木扶桑之梢故呼日本云扶桑国也。いひ。日本紀纂疏ま。凡吾国名通和漢有一十三と云へる中ま。六曰扶桑国。東海中有扶桑。兩幹同根日所出処。故借用とあり。此を非とせる説も。松下見林の異称日本傳。井沢長秀が俗説辨。あぞふ見えて。末ふ論ふが如し。然て。壜嚢抄。礒取。盧島の條ま。兼名苑云。扶木ハ一名方四。一名方出と云へる事もあれど。其所出を知らぞ。

斯て扶桑と云ふ名れ。古く彼國籍ゆ所見〻ゆ所れ。山海經ゆ
ア。此經の海外東經ゆ云ふ篇よ。竝ゆ出せる地名國名れみ
ゆ皇國分内ある由を稽へ明むれど。扶桑と指ある國の。皇
國ゆ所こと。甚詳ゆぞ知るめゆ所。抑是經はも。漢れ劉歆ゆ校
定れ表ゆ。禹定九州而益等類物善惡著此書皆聖賢之遺事
古之明著者也と記し。王充論衡ゆ。禹益竝治洪水。禹主治水
益主記異物。海外山表無遠不至以所聞見作山海經と云ひ。
早く周代れ書。列子ゆも引〻ゆ所文有れど。此よゆき古書ゆ
ゆ所ゆ。中ゆ周代ゆ加ゆし文ゆア。ゆ〻漢代ゆ加ゆ〻ゆ所篇も
有ア。其を判然ゆある事ゆ所よ。後人是義を得知らゆ。此書を

疑ゆる倫も多ゆ所れ。濺く攷ゆざゆ所者ゆア。然るれ清の姚
際恒ゆ。古今偽書考よ。山海經、漢志ゆ不著撰人名。劉歆以為禹伯益撰。可笑。經
中ゆ言夏后氏。殷王。文王。且言長沙。零陵。雁門。諸郡縣。歆不知欺
誰乎。此蓋秦漢間人所作者。人已多論之矣と云ひ。四庫全書
提要。及び簡明目録も同説ゆて。司馬遷称之。則亦周秦以來
之古書也と云へア。司馬遷称之れ。史記大宛傳の末よ。太
史公曰。至禹本紀。山海經。所有怪物。余不敢言之也と有るを
云へるゆ。まさ偽書考よ。人已多論之ゆ云ゆ所れ。杜佑通典。鄭
樵通志。胡元瑞筆叢ゆどゆ。早く論へるを謂ふゆ。
爰ゆ近頃清れ畢沅ゆ校正本を見れど。列子按夏革以為夷
堅所志。又夏革曰。大禹曰。地之所載云〻。四十七字。是經海外
南經文。又呂氏春秋本味篇。按伊尹說多取此經。夏革伊尹。皆
湯時人。則此經為夏書無疑矣。故自唐以前。劉歆奏。王充論衡。
趙曄吳越春秋。皆以為禹益所著。博物志曰。太古書今見存。有

神農經。山海經。水經注曰。禹著山經。淇出沮洳。又曰。山海經。創之大禹。紀録遠矣。鄭玄注尚書。服虔注左氏春秋。皆用山海經。疑此經自杜佑始と云へるは。期せずして余が意に適せる說形。あわ條〻に精しき辨あり。此經を讀む人。必その校正本に就て見るべし。然れど其注も未だしき事ども多かり。

まゝ按ずるに。隋書經籍志に。漢始蕭何得秦圖書。後又得山海經。相傳以爲夏禹所記也と云へる事も有。されば漢代に此經の傳はまる由來あり。今それ海外東經は全文なり。本書の次第は隨に舉て。說著はしたと左の如し。んぞや。日むかしは大樹のもやれ神〻の〻。四方は木くちの言や免て聞け。

山海經海外東經云。䨻邱。爰有遺玉。青馬。視肉。楊桃。甘柤。甘華。甘果。所生在東海。兩山夾邱。上有樹木。在堯葬東。

本經此文は上に標して。海外自東南陬至東北陬者を云ひて。第一は是䨻邱を出せり。在堯葬東と云へるは。是東經なり。前ある海外南經の終わに。狄山。帝堯葬于陽。帝嚳葬于陰と有る山を云ふ。是ぞ。諸注は其所在詳ならず。然れども。彼國ふて海內東南と指はれた。豫州を中にして。揚州を云ふ域を謂ひ。まゝ海外は東南と指さきは。必わが筑紫國を謂ふ例なれば。禹貢の時は揚州東面の中邊なる。東江攜李などの海嶋に。堯葬あるべきを推慮る。但しかく定むる由は。大荒南經に。帝堯。帝嚳。帝舜。葬于岳山と有る郭注に。卽狄山也と云ひ。其山は並べて。有印山者。大荒之中に有山。名曰天臺高山。海水出焉と載せる山は。疑

あく舟山補陀山を云ふと聞え海水出焉とは灌門海の事
を云ふと聞ゆるを以て如此を思ひ定めしなり但これ実に
葬所をは非ず郭注に按帝王冢墓皆有定処而山海経往く
復見之者蓋以聖人久於其位仁化廣及至於殂落四海無思
不哀故殊俗之人各起土為冢是以所在有焉亦猶漢
氏諸遠郡国皆有天子廟此其遺象也と云へるが如し是邊に
は正東は荒外なり直径に推求むれば海上三百里餘りにして
我が筑紫の薩摩國頴娃郡は海門岬也大隅國大隅郡佐多
岬は處に至る髮郎と謂ふは疑あく此處あり其は兩山夾
郎とは海門岬を佐多岬とに夾まれて櫻嶋あ原を謂ふと
聞えはさ海門岬に謂ゆる海門が嶽なり此所に神名式に
出ある枚聞神社なり國史には開聞と書れしなり今此山を海門が嶽
と謂ふは開聞の字音より称ひ來れるか或は此所のさま
海門とも云ふべき形あれば別にかくも称せるにや或書

に海門山一名空穂島在上に樹木なしなり云ふ原は櫻島を
頴娃郡枚聞郷と云へるは其本文は地形訓
城謂へるを知るべからず其は髮郎は所の畢沅が注に淮南
子に作華郎と云へる其本文は地形訓
に彼国の東北方に有る赤水の事を云ひて昆侖華郎在其東
南楊桃甘櫨甘華百果所生と有りて高誘注に皆異物也と
有るを云ひ昆侖を釈名に丘一成曰頓丘再成曰陶丘三
成曰昆侖とあはを思ふに昆侖華郎と云へ原が開聞の嶽を
薩摩富士を称ふる事にはえ思ひ合さるれば山海経に
ある海外北經の末にも平郎とて相類さる郎を出せり然
れど其は華郎は訛傳を聞えしなり今は考へにしも要なき事あれば略
て知らし

大人國在其北爲人大坐而削船奢比之尸在其北獸身人
面大耳珥兩青蛇

大荒東經に。此國を出せりは。東海之外。大荒之中に有山。名
曰大言。日月所出。有波谷山者。有大人之國。也有。まさ大荒北經に有
人名曰大人。有大人之国。釐姓。黍食云くと有るも。畢沅が言
は。此似釈海外東經大人国也と云へるが如し。然まても。釐姓
と云へるも訛傳あり。本文は劉歆が校文に。一曰在肅邱北と云へり。然る
に同じ筑紫内に。謂ゆる肅邱の北に當り。日月は出ず所
も言べき大山も。日向國霧嶋山あり。然れば大人の國と
は。此邊を言ひしと聞えあり。まさ波谷山も。謂ゆる法華
ふ。大言山の外に。日月所出も云へる山も。合虛。明星。鞠陵。猗天。
蟄明は五山あり。皆高山は名と聞ゆれど。何の山くを云ふ
知がさし。ちて郭璞傳ふ。今の本文ふも註を加ふ。大荒東經は。
有大人之國と有ず所に。按河圖玉版曰。從昆侖以北九万里。

得龍伯國身長三十丈。生万八千歳而死。此文を列子張湛が
四十丈とあり。從昆侖以東得大秦人長十丈皆衣帛。從此以東十万
里。得中秦國長一丈。穀梁傳曰。長翟身横九畝。載其頭眉見於
軾。即長數丈人也。秦時大人見臨洮身長五丈。脚跡六尺。準斯
以言。則此大人之長短未可得限度也と云ふ。まく晉永嘉
集於始安縣南廿里之鶩陂中。民周虎張得之。木矢貫之。鐵鏃二年有鶩鳥
其長六尺有半。以箭計之。其射者人身應長一丈五六尺也。又
平州別駕高會語云。倭国人嘗行遭風吹度大海外見一国人
皆長丈餘。形狀似胡蓋。是長翟別種。箭殆將從此国來也とも
云へり。今此を考ふるに。河圖ふ。龍伯國は事を早く列子湯問
篇は夏革が語ふ。天帝かの五神山を禺疆に命じて大鼇ふ
戴ゐ志免給へ依事を云へる所に。龍伯之國有大人舉足不盈

數步。而豎。五山之所。一釣而連六鼇。合負而趣歸。其國。灼其骨。以數焉。張湛注了。數。筭計也。以高下周圍三万里。山。而一鼇頭之所戴。而此六鼇復為一釣之所引。龍伯之人能并而負之。又鑽其骨以卜。計此人之形。當百餘万里。鯤鵬方之。猶蚊蚋蚤虱。耳。則大虛之所受。亦奚所不容哉と云へり。一鼇頭と有る一を。三の誤写あり。其れ本書の全文を見るよ。一山を三鼇ずゝ了て。戴く由れきばあり。於是岱輿。員嶠二山。流於北極。沈於大海。仙聖之播遷者亘億計。帝憑怒。侵減龍伯之國。使阨侵小龍伯之民。使短至伏羲神農時。其國人猶數十丈。と有るを云。況あまど。此を今の本文れ大人也は。固よりあ別ふして。此了引出ぎき事よ非ず。然るは夏革ゞ此事の談よ及べる也。是るり前了殷湯ゞ物有巨細乎。有修短乎。有同異乎と問ふ事依よ依りて。巨細の別を諭さむ為よ。まず大壑れ大を說き。この後此。龍伯人と。僬僥人の長短異ある事よ及び。然て下ふ鯤鵬の巨大也。蜩れ微細とを比諭せ況了て。僬僥人をば殊了東方と云へれど。龍伯了東方と云ざるを思ふぎし。斯て是。僬僥人を東方也云へるは。故実ある況事あり。其れ三五本国考。第三條の附録了云ふを見て知べし。偖この僬僥れ本拠ある寓言よも非也。然れど此も今し要ある事ふ事れて思へば。龍伯の說も。古傳ありし事了て。も非ざれば。由あらむ時ふまさも論ふべし。はゝ大秦。中秦。長翟れぞれ傳說も殊よ叶はず。按ふ了此を今も。謂ある南阿賣利加の分内ふ。巴太碁羅須とて。長人の國ある由あれば。其傳說を訛れるふも有るぎし。此。謂ある巴太碁羅須の事も荒井君美ぬしれ采覽異言了。其見聞よ及ばれし。長人の傳說を集めて。其所見を述られ。山村昌永ゞ此書れ増訳了。西洋書を數部引きて。精く載せり。まゝ古微書の河図玉版れ所よも。種ゞの書よ了。長人の事実を拾ひて。論へる說等あり。就て見るべし。偖まゝ海内北經了。大人之市。在海中と云況を。大荒東經ふ。有大人之市。名曰大人之堂。郭注。亦山名。形狀如堂室。正大人時集會其上。作市肆也。有一

大人。踆其上張其兩臂。踆或作俊皆古蹲字莊子曰踆於會稽也。○畢沅曰臂旧作耳今据太平御覽改正。

也。風物ふれば。此も本文とは固より別義ふり。彼國ふては。東海邊ふて見由ふれぞ。皇國ふては。東北邊の国くれ山ふて。時く見る事あるとと聞くるる。此を見くふ人くれ談を聞き持ちるる。或た大人集會して往來ふ狀を見る事あり。或た世ふ画き傳ふる山越の弥陀といぬ物ふ見成ふ事も有りと云へり。甚も奇異ふる事ふこそ。然ふ三神山考ふ記せふ海市山市の所ふ合せ考ふべしかくて今の本文ふ。大人國在其北云くと云へる國た淮南子時則訓ふ。東方之極自碣石山過朝鮮貫大人之國高誘云碣石在遼西界海水西畔在其東朝鮮樂浪之縣也貫通也大人国東至日出之次搏木之地青土樹木之野搏木搏桑皆日出之地也大

皐句芒之所司者。万二千里。と有る大人之國ふて。我ゞ筑紫國を稱るふ。其た次條ふ論ふふ俟度し。○奢比之尸在其北云く。郭注ふ。神名也。珥以蛇貫耳也とふ。劉歆ゞ校文ふ。一曰肝榆之尸。在大人北と見えたり。大荒東經ふ。此事を載せるふは。有神人面犬耳。獸身珥兩青蛇名曰奢比尸有五采之鳥と見えたり。卽大人之國と號りし域の北境ふ。此神た住める由ふ。

君子國在其北衣冠帶劒食獸使二大虎在旁其人好讓不爭有薰華艸朝生夕死重重在其北各有兩首朝陽之谷神曰天吳是爲水伯在重重北兩水間其爲獸也八首人面八尾皆青黃。

君子國を大荒東經ふに有東口之山有君子之國其人衣冠帶劒郭注云亦使虎豹好謙讓也とあり畢沅曰淮南子云東方有君子之国高誘注云東方木德仁故有君子之国說文云東夷从大大人也夷俗仁仁者壽有君子不死之国孔子曰道不行欲乘桴浮于海有以也彼國よゆ東口之山と指さる方位を按ずるに肥前肥後の西面より筑前筑後豐前豐後の邊まで城云ごと聞も然れど此も大概れ議ふこそ有き實には深く拘を係る事ふ非ず然るは大人國君子國ぞ二ふ別て稱にきと淮南子を始め諸書を參攷ぞ係ふ實に一國に二名を稱せ係ふて同じ筑紫の域内を云へること著明ふ有り然れど其も前に筑紫は都し給へる間の事にて山海經の成きる當昔までも然有りし故に右れ如く記せしあり然れど神武天皇以後に大人国君子国と云ふも都て皇国域内を指にこと云ふも更あり然らば大人之國とも君子之國ぞも稱せる由來は如何と云むに まふ大人ぞは皇國ふも人世と成ても九尺一丈計ある人多く脛の長の七握八拳ふるも有しらば況て神世ふ大人に多ありし事ふし量るぼしぼふ衣冠帶劒して讓を好し爭ふ事ふく嚴然ぞして君子の風ふありしも皇御孫命に都し給へる國内ふまだ然有しこと疑ふし然れど此はもと皇國に自稱ふ非ず彼より稱せる號ふるに其由來を尋ぬれば彼國の古代に君王大人ふありしは皆皇國に神眞の渡り給へ係ふ係故ふ其君師大人の本國さる義をもて號けし者ふり其も

天地人は三皇と更れ出て次ある六皇及び太昊氏・女媧氏なぞの皇国より出づる由を既に春秋命歴序考よも云へれど豈此皇等のみあらむや神農・黄帝・少昊・顓頊・帝嚳れどの聖人さちも皆此が皇国より出て彼の君師と為れるこそ三五本国考より論ふを見て知べし。偖其君子國と云ふ稱も件は山海經の外ふも古く黄帝本行記に鳳凰の至れる事を記せ所に出

於東方君子之國云くぞ見え許慎が説文・京房が易傳なども此説を出せるも此記を取れる物ろ然も有らば本行記いと古き書なりとれり淮南子地形訓ふ東方有君子之國ぞ有ふ高誘注ふ東方木德仁故有君子之國其人衣冠帯劒使二文虎也ぞ云へ逢吉が按注に説文解字曰東夷從大人也夷俗仁仁者寿有君子不死之国即与此解同と云へるも然る言よて後漢書よ東方曰夷天性柔順易以道御至有君子不死之国焉云くと有り然て本文の諸本よも二大虎と有ふ後漢書の注そ引とるよは二文虎とあり大抵山海

經の成れる當昔按ふに彼土の海外東ふ衣冠帯劒して禮讓ある國も皇國を除なて有こぞ無し是を以て皇朝は古き學者さち三善清行朝臣は意見封事れど其餘の紀文ふも此君子國と云ふを皇國の事と形し彼国人まさ直情れるは後までも然稱せ紀其も續日本紀に大宝二年よ粟田眞人は遣唐使とちて罷

とるに彼国の楚州と云る所は人ども皇朝の使人さちを見て聞海東有大倭国謂之君子国人民豊樂礼義敦行今看使人儀容豈不信乎ぞ云ふ事あり又も彼国は常人の直情れるが直言せるあるを中くに官途の族まさ學者等ふども強て彼国人に甚く劣れる趣よ曲言して書載る習れるを此方の學者は彼土よ心引ふ倫も却りて其曲言をし信は事とぞ思ふめる抑君子ぞ稱せ本義も君は君王は義子も

丈夫の通稱ふて大夫を夫子と稱ふ子ふ同じ大夫を夫

子と稱せる事は。古書大抵さこの通中ふ。左傳昭公七年九月
れ下ふ。孔子を夫子と稱せる事ありは孔疏ゑ。身爲大夫乃稱
夫子。此時仲尼未仕。不得稱爲夫子。以未仕之時爲仕後之語。
是丘明意。尊之而失事實。陳恒未死言謚。亦此類也。ゆえ有ふて
知ばし。然れど師長を夫子と稱せるは。是より轉用せる語
あり。但しそは彼土こそ有れ。俗の漢學者ども。謾ら
師長を夫子と稱せるは。句讀を授け詩文を教ふる。村里の
凡師長らが諂ひ居るを。傍痛き事あり。此を序れ是ぞ驚ろ
し論ふ。
のみ。ちて君子とは。も。ゆえ君王を稱ける語ふ。故ゑ民ふ
對し衆庶ゑ對し。ふ人ふ對し云ふこゆえ多ふ。其は易の大
象は文。まゝ繫辭傳ふどよ。君子と稱せる條ゝを見て知べ
し。禮記玉藻の鄭注ゑ。君子ゆえは。大夫士也と云ふれゆえ。大夫

士ふ稱ける。を稍末ゑて此よゆ轉ゆて後ゑは。賢き淑人を
云ふ稱ゆは爲れゆ。其は論語ふ。孔子の君子と稱せる條ゝ
十ゑ七八は。王公侯族ゑ當るを其二三は賢者ふ云へ。孟
子ゑ至ゆて其方ふ專と云ふ言ゆ爲さるを以て知ばし。漢
來唐宋までは儒者の注疏どもは。然ふ淑人を君子と稱ける
る事の本義ゑ。謝得さる解を見ゆ。故是を以て煩しき所爲
は有れど。經書及び諸子ゑ君子を稱ける句ゑ摘み章ゑ
探ゆて。かくは定め。近くは荀子王制篇は。天地生君子。君
子理天地。君子者天地之參也。方物之總也。民之父母也。無君
子則天地不利。禮儀無統。上無君師。下無父母。云ゝと云へふを
始め。君王を云へること甚多く。賢人を稱せるも。亦計ふる
は暇あらば。猶別ゑ著ける孔子聖說考は云ふを俟べし。ま
さ大人國と云ふ。伏羲は。皇國よゆ渡ゆ給へる神聖ゝち。緯
書どもふ。伏羲氏九尺有一寸。神農氏八尺有七寸。黃帝氏身

逾九尺にして有ぶとく。彼國人よりも丈高のアし故ゥ。其國人どちの。丈短ぎ小合せて稱せるゥ本ゆて。其徳ふも叶ア稱せアと聞ゆ。彼国れ古尺を。我ゥ曲尺の七寸五分ゥ當ること。赤縣度制考ゥ。委曲ふ論へるを見るべし。然ぎばこそ是まゝ小人ゥ對し。民庶ゥ對して。君師さ俗人を稱アれ。其ゑ易の文言傳ふ。夫大人者。與天地合其徳。與日月合其明。與四時合其序。與鬼神合其吉凶。先天而天弗違。後天而奉天時。天且弗違。而況於人乎。況於鬼神乎と見え。荀子解蔽篇ゥ。明參日月。大滿八極。夫是之謂大人とあるも是義あり。まゝ孔子家語ゥ。今の文言傳と同文ふして。大人の二字れ聖人と脚れる孔語あり。周易ふ。利見大人ゥ云ふ語の許多ゥ俗を乾鑿度ふ。孔子曰。易有君人五號也と云へる語中ふ。大人者聖人之在位者也と見え。孟子離婁篇れ趙注ゥ。大人謂君也とも有るを。相發しを辨ふ。小人と云ふゑ。君ゥ對して自ゥ卑ゥ。元ゑ民庶の事ゥ。君王ゥ小反れる行ある故ゥ。まゝ轉じて拠て其行ひの好ゥ。君王ゥ者ゥ。大人君子ゥ對して。博く小人と云ふ事とゑ成れり。大人君子は。もと君王の事ゥ。博く賢人ゥ云ふも是ゥ同じ。ゑ。譬へば。坊舍れ主ゥ。貴人の僧形ある。坊主ゥ云ふより轉アて。今世ゥ四頭れる人をゞ。拠て坊主と云ふを。頭ゥ髪ゑ有ゥ。ゆゑ。四頭ゥ。山頭ゥ。者れ為べき職を。勤むるをも。坊主ゥ名くる類ひゥ。よく似さり。然れゞ今れ本文ゥ。大人君子と。國名を二ゥ別されど。唯一域ふ二名を稱せる者れるこゥ。君子ゥ大人とも稱し。大人ゥはもと君王の事ゥ俗を思ひ合せて知ぎし。斯て其大人國と云へる文ふ。爲人大坐而削船と云ひ。君子國ゥ云へる文ゥ。使二大虎

在旁と有るは。此經の古圖ふ。志の畫なて有れ当由れ已。其
畢沅が校正ま云へる如く。凡て是經。南山。西山。北山。東山。中山
の五篇れみ。実ふ伯禹れ書紀れるが。海外以下を本經ま附
りて傳ま。海外山川。人物等の図れ有りるま。周代の人。そ
れ図の古説ま集記せし詞書ある。後ま。その図れ失せて。
文書れみ存れるあり。故それ意を得て見ざれど解し得が
さき文ども多ろ已。今の二文も。即其詞書あり。坐而削船と
を。其古図ま。大人れ流狀を示せむと為て画さりと聞え。使
二大虎在旁を然る嚴然さる君子れ旁ま。その使ふ二大
虎を画れる由あり。次くの文ま。ちて和漢の古人。これ君子
も是ま准ふべき事ども有り。
國ま。皇國の事と爲さ流ま。井澤長秀が論ふ。我が國ふて。虎
を使ふ事れく。薫華州も無れど。皇國の事れら已と言れ
ど。此を頑なる説形已。其を爲人大を云い。衣冠帯劒。好讓不
爭と有るは。並てれ風ふて。虎を使ふと有るは。並てれ風を

謂ふま非已。是ま以て大荒東經ふた。君子之國。其人衣冠帯
劒とれみ有りて。餘事ま記さど。又後ふこそ然る事ありま。
神世の多ふ流神等れ中ふ。韓國よりあ虎を生捕已來て。畜ひ
馴し使ひ給へる事の有むも何ま疑はむ。彼所れ僊人等ふ
も。然る倫多かれど。神世ま然る事れしと云べ。ら已。古く膳臣
巴提便れ。虎を手捕まして。舌を抜きて蹈殺し。豊臣。大臣の
時ま。韓国より生捕已來れる虎の。當時れ益荒男さちま見
て恐りさる事の。記録ども
ふ所見ふ流をも思ふべし。まく。薫華州ふし也言れど。薫
は堇れ誤字ふて。木槿ふ種ある古と著く。此は山ま里ふも。叢
生ける物れる故や。薫の誤れる由ま。郭注ふ。薫或作堇と見
夏之月。木槿榮。詩云。顔如舜華。即堇也。本草謂之朝開暮落花
薫為堇無疑と云へり。但し此ま其苗の朝ま生じて。夕ま枯

依〻由ふた非ず。其花の朝ゟ開ぎて暮ゟ落るを云へるあり。
○後ゟ説郛ゟ出せる。玄中記を見れど君子之国地方千里
多木槿花とあり。まさ張華が博物志ふも君子国人衣冠帯
劒使兩虎民衣野絲好礼讓不爭土千里多薰華之草好讓故
為君子国とぞ見えさり。○虫くハ在其北各有兩首は郭注ふ虫音虹とも。
虹蝃蝀也とも有れど虹を司る神ゟ謂ふと聞ゆ。○朝陽之
谷神曰天吳是爲水伯云〻は大荒東經ゟ有夏州之國有蓋
余之國有神人八首人面虎身十尾名曰天吳と有ア夏州之
國蓋余之國ともゟ筑紫内のふ地名とも聞あれども詳ふ
らず。天吳の居所も朝陽之谷と云ふ。有兩水間と云へるゟ按
ふゝ。豐後國佐加關と伊豫國三埼ぞれ間ある洋を謂ふゝ。
其も此邊はも南ふ大洋あア北ゟ内海ふのゆ。兩水ふ間れと

依所ふれど所ア。後ゟ生田国秀ふを見て云ひらくも。朝陽
之谷も即湯谷ゟ。朝字の添はりしは日
月所出とも云へる谷ふ故ゟは侍らじゟ。其在兩水間ぞ有
るも此辺もぞゟア内海ふきど。其谷を中ふして見らむ
ふも。兩水間と云むも難れゟ依べくや。但し此文の続き
青邱国云〻を隔て黑歯国の下ふ依湯谷と重複せれど其
は豈これのみゆらめや。此經凡て重複の多々れどかふの
くふ朝陽之谷即湯谷ふりと見らる方穩ゟは侍らじゟ。と
云へり。第五條湯谷の
所と合せ考ふべし。

青邱國在其北。其狐四足九尾。帝命豎亥步自東極至于西
極。五億十選九千八百步。豎亥右手把筭左手指青邱北。
青邱國とは。東方朔が十州記ゟ長州一名青邱在南海辰巳
之地上饒山川又多大樹乃有二千圍者一州之上專是林木。
故一名青邱又有仙草靈藥甘液玉英靡所不有又有風山山

恒震聲有紫府宮天眞仙女遊於此地と有る長州是なり但し此文り南海也有はた東南とあアし東字は落ゐはれアア其を何を以て知ると言むか廣黃帝本行記より東到青丘見紫府先生登於風山受三皇內文天文大字云く呂氏春秋り禹東至鳥谷青邱之鄉まゝ清靈眞人傳か乃遊行天下東到青丘遇谷希子云くゐゞ有りて一向り東方と指さるを辰巳之地也云へるか相合せて辨ふべし即り此徐州の東南海外の辰巳ゟ當る由ゐアアゐほ青丘を東方海外と為さる諸書に傳說多りれど盈を引出さゞ然らば其青邱とは何處あると言ふり大人君子は國の北か在る由ゐまで筑紫の北面火國豐國を本ふて四國木國ゆさゐ迄を廣く指さアと聞也そは長州と云ふ號も由有アて聞えそれ青邱といふ名を正り大樹は繁茂せる故は名ゐるを火國よアア東南木國か至はまで神世のゐゞは殊り大樹は茂れるか思ひ合されり扨十州記よ其域內か有風山山恒震聲と有はも伊豫國り風早郡あアア烈風ある所ゐはり相符ひて聞ゆれだ形アア其大樹どもの事を第九條の末か盈く引出るを見るべし まゝ今引ゐはる書等ゟ紫府宮紫府先生谷希子 まゝ三皇內文といふ物の事れどを本編ちて其赤縣太古傳は三皇紀り委く云ふを見るへし

四足九尾を大荒東經か青邱之國有狐九尾と出さる郭注か大平則出而爲瑞也也ゆり然るか海內南山經りも青邱之山其陽多玉其陰多青雘有獸焉其狀如狐而九尾其音如

嬰兒能食人食者不蠱とあるは別ふて乃本文は青邱ぞ云ふ名を海内ふ移せるれア其は本文は也眞の九尾狐ある城南山經ゐるは狐ゐ如ふ依獸の九尾ゐるゲ住ゑ依故ふ姑獲と稱せ依ゐらむ凡て彼国は地名ゐ此山は名のみれらず海外の地名ゐ移せる名いと多し其は然る地名の出る処くゐ云べし此て帝命豎亥云くは山海經は更ゐゆ他は古書ふても斯の如ず事ゐ打任せて帝と稱せるは多く天皇太帝城指せり然るふ此條は劉歆ゲ比校ふは一曰禹令豎亥云くぞ有ア淮南子ゐも禹ぞ有る城黄帝本行記ふは乃黄帝は事と爲ゐゆ今何を是とも思ひ定ゑ難し此は

ゐか後生の考按ゐ俟べし

給ふ時ゐ大地の四正ふ立給ひし謂ゆる四極の第一ふて岳瀆名山記ふ東岳廣桑山在東海中青帝所都と有る域を云ひて此は神典ゐ伊邪那岐大神の自凝嶋ふ天柱國柱と立給ひしぞ有る御示は化きる山即是ゐア淮南子地形訓ゐ東方日東極之山旦開明之門と有る高誘注ゐ日之所出也故曰と開明と云へるも此山ゐ有り是は本編ゐ云を見るべし此山今現ふ淡路國ゐ属ゐて其西北隅ふ在るを此所ゐ立ちて西ゐ向ア ば青邱ゐ依阿波伊豫豊前筑前肥前は皆其左手ふ指ゐア斯て下文ゐ謂ゆる湯谷は此山ゐ正西ゐ當ア程近き内海ゐ在り然きば此内海の所ふ豎亥を居しめて四方の極ゐア極ふ至る里程ゐ推歩せし知ゐる由形ア

歩と畢沅が注ふ。鄭君注尚書大傳云。歩推也。高誘注淮南子云。善行人誤矣と云へ所と理さる言ひあ。然れど推歩の歩と。も歩行して算せる了出さ所語ゐるこ。已別ふ考へあれど。此よと漏し扨。右手把筭。左手指青邱北とは。乃豎亥の圖象と有狀を謂ふ。諸本ふ筭を算ふ誤れあ。今は畢沅が校本ふ據あて改め扨。筭は說文了。長六寸。計歷數者。从竹弄。言常弄乃不誤也とあ。歷象測量の事。まさ我が東極より起原せること。是よて其端倪を知るべし。此事委くと。三曆由來記了說さ所ふ見るべし。

黑齒國在其北。爲人黑齒。食稻啖蛇。一赤一青。在其旁。下有湯谷。十日所浴。湯谷上有扶桑。有黑齒北居水中。有大木。九日居下枝。一日居上枝。雨師妾在其北。其爲人黑。兩手各操

一蛇。左耳有青蛇。右耳有赤蛇。

大荒東經了。有黑齒之國。帝俊生黑齒。郭注。齒如漆也。聖人神化無方。故其後世所降育多有殊類異狀之人。諸言生者。多謂其苗裔。未必是親所產。姜姓黎食使四鳥。あ。有其北云くは。青邱と北了。豎亥の筭ふ把ゆて西了向ひ。左手ふ青邱を指さ所圖あて。其北ふ此國ふ畫ふ。其所ふ黑齒れる人ふ畫きて。其傍ふ二蛇を畫添ゐ所ゐ。一と赤蛇。一は青蛇ある由れあ。黑齒之國とは。乃黑齒の生國と謂ふ如し。帝俊とと。帝嚳高辛氏の一名ふあ。前ふは郭注ふ。俊。亦舜字假借。音也と云る說ふ依ゆて。虞舜と事と爲さ所と惡ろあ紀。其と路史高辛紀了。帝王世紀を引きて。帝嚳生而神異。自言其名曰夋。山海經作俊。言帝俊處其多。皆謂嚳。郭注皆以

為舜謂舜俊音相近失所考矣と云ひ畢沅ゲ山海經れ注まさ徐文靖ゲ竹書紀年の統箋も路史と同説りて共ヨ然る事あきでれり。ちて黒齒ち。郭注ヨ齒如漆也。聖人神化無方。故其所降育多有殊類異狀之人と云るふ依れど。其國人みれ黒齒あるとと謂ふりは非ず。此一人のみ生あぐらふ其齒の黒ず故ふ。是名を負しず聞えるか。但し郭注ヨ。諸言生者多謂其苗裔殊必是親産と云へるを彼処れ先輩ら多く此説りて依さきど。此ち帝嚳の親産あること疑あし。ちて本文ふ。爲人黒齒。食稻啖蛇と有るふ就て臆説あり。其は何也ゆむ書名ヨ忘れあり。彼國籍り食稻者齒白。食禾者齒黑と云る語れ有れど。此人稻は食ずず齒の黒ず意りはさ若くち。好みて蛇を食ひし故り。蛇毒を解せむと。鐵醬もて常ふ齒を染て在りし

も亦知ぢらず。然れど上れ郭注ヨ。聖人神化無方云くと云へるヨ拠きど。予ゲ今の説はみれ強訂り。何れふ依るとも。其国あべて。其為人ありと謂ふりち非ず。帝俊の親産せる一人の黒齒ありし事ち論ひあくあむ。下ヨ引く呂氏春秋黒齒之国と有る所れ高誘注り東方其人齒黒因旦黒齒之国と云るち。山海經の文をよく察ざる誤りあり。ちて下有湯谷。湯谷上有扶桑とは。黒齒國れ圖より下ふ湯谷れ圖を畫き。其湯谷の上り扶桑國ヨ畫ゆる由あるゲ。然のみ言ひてち。黒齒れ湯谷の上ふ在ぢず。異名同處の如く聞ゆる故り。はさ在黒齒北。居水中在大木と云ひて。共ふ湯谷れ上ふち有きど。其州の各別ある由を示せるれり。此ち古人の文辞れ丁寧深切ある所あり。心を潛めて視るべし。故是方位説ヨ據り。呂氏春秋求人篇ふ。禹東至榑木之地。日出九津。青羌之野。鳥谷青丘

之郷。黒齒之國。高誘注。榑木。大木也。津。崖也。淮南子。日出暘谷。青羌。東方之野也。東方。其人齒黒。因。旦。黒齒之国。○増注。榑木。即扶木也。と有ふを照し合て其所在を索むるふ。先謂也る青邱を。既ふ云ふおとく。筑紫の北面ゐる豐國を本とを て。其東西の國くを指こを疑ひ無きだ。此豐國は北りて。黒齒國ふ當ふ一渚を索むるふ。豐後は國崎の東郡。伊波比洋の西南ま。今現り姫嶋と稱を奈ふ嶋あ正。此を神典り二柱神。已り大八嶋國を次くふ生給ひ。然後ふ。まゝ六嶋を生給ひし中ふ。女嶋亦名謂天一根。と有る嶋あり。黒齒之國を疑れく是あ正。前り是扶桑国考を草稿せし時ま。此国の所在を未だ思ひ得ずて。我が南海り在る島国は名ありしゲ。早く其古名を失ふる故ま。其国は今の某島と云こを決め難しと云へるを。今思へだ拙ろりま。其を右呂氏の文を更

あり。淮南子脩務訓ふ。堯西教。沃民。東至黒齒。北撫幽都。南道交趾。と有る高誘注り。沃民。西方之国。黒齒。東方之国云くと有るまて。我ゲ東方あること著し。然るを郭注ま。魏志の東夷傳を引きて。倭国。東四千里。有裸国。裸国。東南有黒齒国。船行一年可至也と云へれど。本文り。扶桑有黒齒北。と云ひ。諸書ま。扶桑は彼国の東海外ま在りて。日の出る所を云へるまも合ざれど。此は荒唐至極の妄誕れりろし。其は此姫嶋は下ふ。豐前國企救郡ふ屬りる速鞆の湍門ゐ正。此を神典り。伊邪那岐大神。豫美都國は穢悪を濯除ひ給ふ所り。乃往見粟門及速吸名門。然此二門潮既太急故還向於橘之小門而拂濯也。と有る速吸門ふて。是疑ふく湯谷ゐ正。然るを其所在。本文ふ黒齒下在湯谷と云るふ符合ざばあ。但し神典ゐる速吸門。まさ妹島の在所を詳り考へ得られざ正しを。速鞆は湍門やゲて速吸門ある事を。小倉の殿人。西田直養といふ人諦り考へて。速吸門考

ぞいふ物を書き。女島の事も。豊後れ杵築の殿人。小串重威と云ふ人よく考へて。姫島考と云ふ物を記せり。其二説ともよ。古史傳まゝ本編了出せれむ。今其定説をれみ出せるあり。ちて呂氏春秋小。日出九津ぞ云へるは。即本文の湯谷ゆ。此谷もしも。本編三皇紀及び三五本國考小言ふ如く。黄帝書小謂ゆ。湯谷神不死。玄牝之門。天地之根。老子ゆ謂ゆる百谷王。列子小謂ゆる大壑無底之谷れるゞ。ゆゝ此を甘淵とも稱ふ。そは大荒南經了。東南海之外。甘水之間。有羲和之國。有女子。名曰羲和。爲帝俊之妻。生十日。常浴日于甘淵。と有る是ゆ。此文。今れ諸本了誤字錯乱ゆり。今ゆ初学記より引ゆる文と。校合して引ゆる所。羲和之國ぞは。羲和の本國ぞ云ふ意の稱あゆゞ。まゝ此を少昊之國とも謂ふ。そは大荒東經了。東海之外大壑。少昊之國。少昊孺帝顓頊。于此棄其琴瑟。有甘山者。甘水出焉。生甘淵。と有る是ゆて。此ゆ少昊の生國と云ふゞ如し。少昊ゆ。謂ゆ。ゆ五帝の第四ゆて。黄帝れ子あり。黄帝乃ち顓頊ゆ黄帝れ曾孫小て。五帝の第五ゆるゞ。此ゆ西蜀の地よ生れしゆど。此国よ在しは故ゆる事れり。帝俊も黄帝れ曾孫了て。唐堯の養父ゆるゞ。此国了て生れゆり。委くゆ三五本国考を見ゆべし。ちて大荒南經の文了。羲和生十日。と有るゆ。郭注小。言生十子。各以日名名之。故言生十日。數十也。ぞ云へゆは然る言了て。日名とは。甲乙丙丁等れ十干を謂ふ。此ゆもと太昊氏の。日數れ名小用ひむ料ふ。作ゆ給ひし物ゆるを。羲和れ生ゆる十子の名了命さる由ゆ。そは大荒西經よ。帝俊妻常羲。生月十有二。此始浴之。とある注了。羲与羲和浴日同。と云ひ。海内經よ。

共工生后土。后土生噎鳴。噎鳴生歲十有二と有る注に。生十二子。皆以歲名名之。故云然と云へるも皆同じ例あり。常浴日于甘淵とは。十干を以て名けし子等を常ふその間なる甘淵に浴せしめて。育養せるを謂ふ。乃本文に。黑齒下有湯谷。十日所浴ぞ有る相照し攷ふるに。甘淵と謂ふた。乃湯谷の別名。羲和之國と云ふた即黑齒之國。まゝ少昊之國なれば。甚明ふ知らるゝ。然れど此は一渚にして。三名を稱せるなり。然れど其みな彼に稱せし名ゆて。實た神典に謂ふ女嶋なること。上に云ふが如し。此国はかく三名を稱せる事は。譬へば孰の国は。同国の産なれ人三人あるを。其国を云ふぞきに。某麻呂が国とも。某子が国とも。何彦が国とも云ふこと有るが如く。古〻も黑齒が生国。羲和の本国。少昊の生国と謂ふに同じと知るべし。抑是嶋を姫嶋とも謂ふ由た。神典に出さる昔語に。新羅國にて。阿具沼。ちふ沼の邊に。一賤女晝寢しに依ふ。日耀虹の如くそれ舍に指さる。一賤夫その狀を異しと思ひて。恒ふ其女の行ひを伺ふに。此女それ時に妊みて。赤玉を産む生れる。三五本国考ふ引さる諸書に。少昊の母女節の。大星虹れ如く下れるに。夢接して少昊を娠み。顙項れ母女樞れ。瑤光虹れ如く其宮に入れに依に感じて。顙項を妊みしと有るも。星と云へるも耀れる故の文。に。実た此賤女の舍門を指さる日耀に同く。是ぞ謂ふる天根玄牡れ氣勢ありりる。其た第七條の注。暘谷。咸池れ名義を説く所に謂ふを見べし。彼賤夫それ玉を乞取ゆて。恒た裏みて腰に著に依を。後に由ゆに。其國主の子ふ幣と爲りに。然るふ國主の子。それ玉を床邊に置しうば。即美麗な孃子ふ化ゆぬ。茲に妻と爲し

て在りるか。其嬢子常に種くれ珍物を設りて。其夫に進めしらば。夫の心奢りて。妻を罵れば。吾れ汝の妻に爲べき女か非らず。吾祖は國に行むと云いて。竊びて小船に乘りて。逃遁れて。皇國に來れるぞ。比賣語曾神と爲れるよし見え。古の事を古事記應神天皇段と日本紀は垂仁天皇紀の一書とに載られさるぞ。其傳の趣異ある事ども有り。合せ見て其異を知べし。攝津國風土記と。日本紀とを併せ考ふ所に。其始を記て著さる處は。豐國は國前郡。伊波比は比賣嶋なりと有り。此乃二柱神の生給へる女嶋。亦名は天一根とある嶋ふて。此を比賣嶋と謂ふは。是比賣神の來り住める故れりとふ說に。誠に然る事とは思ふ物ぞ。此は人世と成りて後は故事ありを想ふに。是より古く義和は住める由緣に小なりて。神世なりとしてもう號け來れるも亦知ぬ事ぞ。其は義和と云ふは。彼国に傳へし漢名にこそ有れ。実は皇国の女神ぞし有れば。此方にて稱せる名の別に有りむ事は云ふも更なり。此謂をも思ふべし。小串重威ぞ姫嶋考に。此は彼比賣神の。其夫に遁れて來り住める嶋なる所ぞ。今に赤水明神とて此女神を祭るとて。其神體は木像にて。婦人は筆を持ち。齒を染むる容れり。古は赤水明神と白水由は。其社の在る岩下より。赤錆の鋏醬水なぞれ出て。手を拍てば響に應じて逆る故に。拍子水と名付け。土人は明神は靈水なりと言ふ也記せり。此は黑齒國とも謂へる故事に。能くも符へる實蹟あ

アあし。まさ姫島考ヲ俗説ヨ此比賣神ぞいふを眞野の長者と云ふ者れ女玉世媛の事とし彼拍子水茨明神の霊水あめと云より古へを知らぬ者の猥ヨ神像ヲ鋏漿ヲ吹くる形ヨ造アあして鋏漿ヲ吹け石楊子枡れど云事をも設け出て名所の證ぞせし物れり然るを齒を染る事を我ゲ国中古より れ風儀あれども上代ふは然る事れりまば後人の所為あること疑あしと記せ法ヲ已も前ヲを諾ひあれど今思へば眞野れ長者ゲ女れ事を非れまど黒齒国と名ゆしを此雫水の固より有アし由緣ヨよりて義和まさ帝俊れ生める子も齒ヲ染めて在りし故あるヲ又或は彼黒齒も帝俊れ子あれむ凡常の戎人れ種族あらず実を大国主神の遠うらぬ御裔れまむ固より神ぐ古く好みて齒ヲ染々む因緣ヲよりて然法雫水の澤出て今ヲ至れる実迹あるも知ぢらば古て神典ヲ此嶋の亦名を天一根と謂へ法名義を壹岐嶋れ亦名を天一柱ぞ有るを海中ヨ離れて一ッある嶋れ故の名あまば天一根と云ふも然る義の名ヨやぞも思アど此嶋大壓暘谷の傍ヲ在る嶋ヲ法故ヲやゲて此ヲ國名とて大壓ゲ昊之國とも人皇氏まゝ義和れ子等を出于暘谷ぞも云へ法ヲ亦れ玄牝天地根れるヲ想ひ合ぞれむ二柱御祖神れぢる幽契をもて名々給へ法も亦知ぢらば其を凡て国くの考ふるヨ其本名と為さるゲ却りて後ヲて亦名といふ名れ神典あるヲぞ二柱神の當者号り給へる名あると思ふ由を既ヨ古史傳ヲ論へれむ今更抑かの比賣語曾神れ吾祖の國ヲ行むヲ委くを云はゲ

とて此嶋ヲ來れる事を師説ヲ皇國を日大御神れ御生ませ法本國あるゲ故れアと言れしは然法説れれど尚按ふか天日れ御國を也此ヨよアを判ゆし物あるか況てそを所治看ゆ大御神これ近ず間あ法橘之小門ふて生坐せる故

小。祖國(オヤノクニ)をは云へ依りて。其を祖(ミオヤ)れ本國と謂ふが如し。此を本編に委く記(シル)せるが。其概略を下に云ふべし。

齒れ北に在りて。水中に居(ヲ)りと言へば。扶桑國とは。長門周防に續(ツヅ)く。大倭豐秋津嶋(オホヤマトトヨアキツシマ)を總稱(スベイロ)し名れる古を著(シル)くはさ有(リ)大木と云へ依れ。卽(イチ)謂ひ依扶桑木れ古を言ふも更れ。大倭豐秋津島(オホヤマトトヨアキツシマ)れ。二柱(カミ)神の生(ウミ)ませる国の多く依中(ナカ)に小も。国れ長子(カミ)ある故に(ヨ)や有(ア)む。ひがし島くに(ヨ)勝れる大州(クニ)にて。西れ長門の豐浦(ヲラ)郡より。東れ陸奥れ津輕(ツガル)南部の端に至(ル)まで。一連に長大に成(ナリ)し国あること。既に古史傳に云へる如(ヒト)あれ。扶桑国をれ。都(ミヤコ)て此(ココ)辺まで云へると心得(ウ)べし。但しそれ扶桑大樹の下枝(シモツエ)に九日居(ヲ)り。上枝(カミツエ)に一日居りと謂ふ事の由なきに小言(イハ)むれ紛(ギラ)はし記事ども有れど。第七條れ下(トコロ)に小說(ハナシ)くを俟(マ)へし。○雨師妾(ハ)

在(リ)其北(ニ)云くは。郭注に。雨師(ハ)謂(ヒ)屏翳(ヘイエイ)也を有(リ)。初學記に。雨師(ハ)曰(ヒ)屏翳(ヘイエイ)亦曰(ヒ)屏號(ヘイガウ)とも云へ(リ)。雨を司る神の漢名れ(リ)。風俗通に。玄冥(ゲンメイ)爲(ナリ)雨師(ハ)とも見えたり。妾を云ふば其女神に(ヨ)や有(ア)む。劉歆が校文に小は。爲(ナリ)人黑身人面各操(ル)一龜(カメ)とあり。偖(サテ)上件奢比之尸。重く。天吳九尾狐。この雨師妾れを更に(ヨ)り。山海經中に(ヨ)れを種(クサ)くれ神物どもれ。現形せる由を載せ依た。大荒西經れ顓頊令重獻上天。令黎印下地とある所れ郭璞注に。古者人神雜擾無別と言ひ。史記の歷書に小も。其世の事に小。民神雜擾不可放(カヘ)物云くを有る如く。當昔(ソノカミ)未顯幽れ間分(ヒダワキ)くしから爰。右の類れる神物。示(カミ)人に形を隱(カクサ)ざ依も有りしあり。列子湯問篇。夏革が語に。鯤鵬

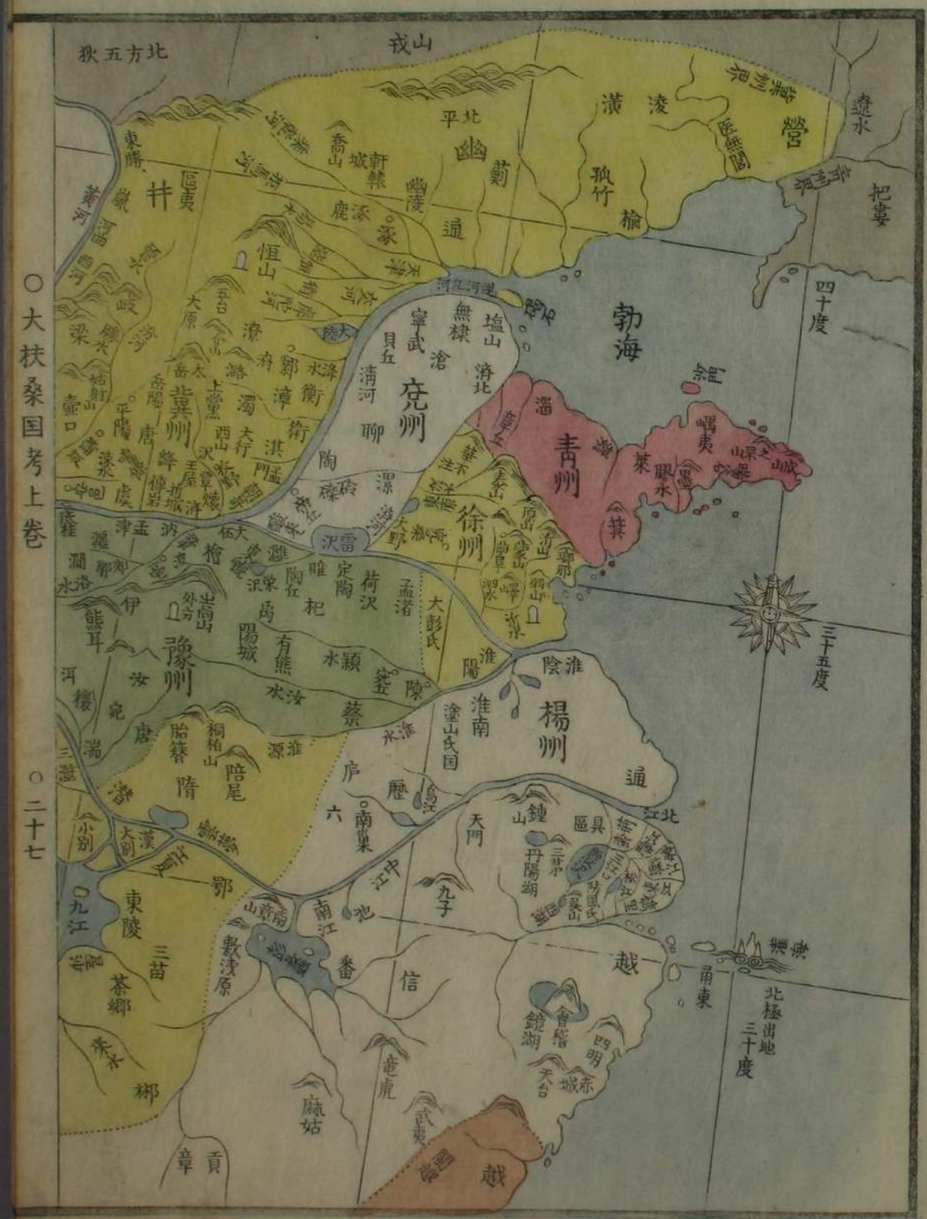
あどの事を云ひて世豈知有此物哉大角行而見之伯益知而名之夷堅聞而志之と有るをも思ひ合はべし然るに漸くに神物は人を避りて世に現形せざ成ぬるを顯幽別なしと謂ふ此を我が神典にても其趣詳に知られさる但し今は其現形あるを以て然ら物無しとれ思ひそよ今も昔に替らず孫ど隱身して在るが故に人常に見ぬ事あき形なり四年に富士山の燒出むとする前に其麓れる村内を夜深りて獸けあまさ行りはひ有ぬに怪みて各くそと指れぞき見れど有ゆる諸獸打群れて去行く趣なるぬ中に此山の獸王と見やる大きなる獸の總身に目あるが諸獸に圍繞せられて立退くを見さりしが其後なども無く山の燒出て泥砂を吹立さるぬに謂ある宝永山を出來しを云へる事ありき是まさ近く文政六年に事あり駿河国阿部郡に正月六日雪の零れる日に井川村と云ふに腰越村と云まで其道三里に間の道に巨人の足迹あり長一尺八寸幅

八寸一歩の間一丈あどにて有り腰越村の入口まで足あと消さに此村れ者に其巨人を見さるにより裸躰にて其肩は軒より上に出さりしとぞ此れ其村の名主次郎兵衛といふ者に新庄道雄が記せり斯の如き物ども今に常に現見ること無く隱身して在るど時に現に見る事も有ぬを以て古今に現隱れ異こそ有れ今も然る物あきに非ざる事を辨べしかるに類の事ぞも博く雜志ぞもに読み国くの人にも探求て聞持てる事ども數有れど然のみを此に記し出さば

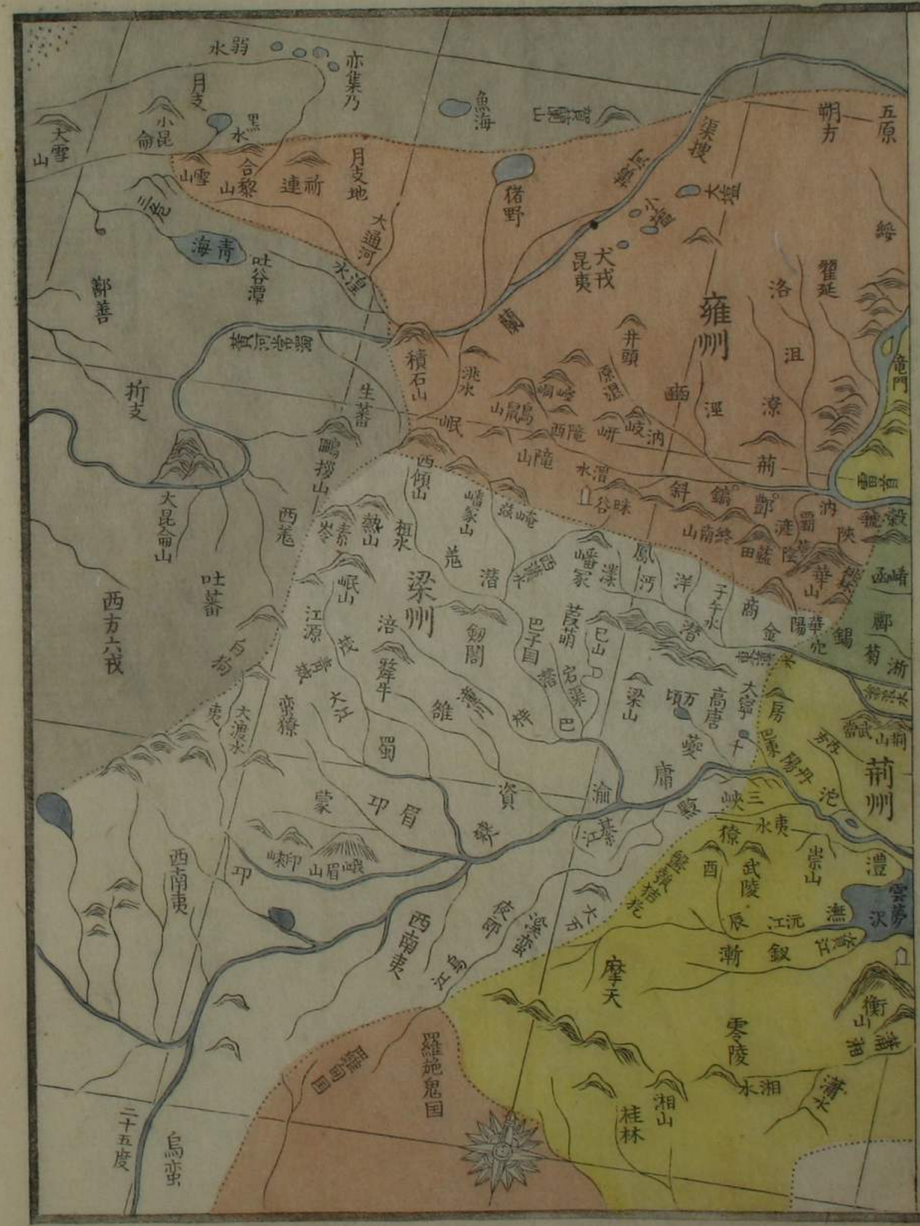
玄股之國在其北其爲人衣魚食軀使兩鳥夾之毛民之國在其北其爲人生毛勞民之國在其北其爲人黑

大荒東經に有招搖山融水出焉有國曰玄股黍食使四鳥と有るは此の玄股之國を釋せるあに郭注に髀以下盡黑故云玄股以魚皮爲衣也軀水鳥也と云へ毛民之國を大荒北

經ふも。有毛民之國。依姓食黍。使四鳥禹生均國。均國生役采。役采生修鞈。修鞈殺綽人。帝念之潛爲之國。是此毛民と有り。然れば夏禹は末ゐ。玄股毛民。勞民と合せて三國。みな扶桑は北ゐ在依由あれむ。我ゞ奥蝦夷は嶋〻を云へるこゝ疑あし。毛民の郭注ゐ。今去臨海郡東南二千里有毛民在大海州島上羣人短小而躰盈有毛如豬能穴居無衣服云〻。ゝを云へる風俗は似れど国の所在は方位違へり。此は非説ゝ為べし。淮南子地形訓。三十六國の所ゐ。自東南至東北方有大人國。君子國。黑齒民。玄股民。毛民。勞民ゝ有るは。是經ゐ採て載ゝ依あ。高誘注ゐ。毛民其人躰半生毛若矢鏃也。勞民正理躁擾不定也と云へり。ちて右條〻の方位説ゐ據わて。皇國と赤縣州ゝ相接ゐる樣を。度數ゐ合せて縮圖ゝるゝと左は如し。凡て予ゞ著書中ゐ。彼方と此方ゝの方位ゐ論ゝ依件〻は。皆是圖ゐ據ゐて索むべし。但し皇国は図は。長窪玄珠ゞ日本路程全図ゐよの万国全図ゐ拠ゐ。赤縣朝鮮及び蝦夷等の境界。まゝ度數の矩は。測量所板土沿革地図は。禹貢図職方図ゐ本据き。明は一統志。まゝ図書編ゐど諸書の図説ゐ校し。中ゐ朝鮮の図は。三国通覽は附図ゐ本据ゐ。且いゐしゐ皇国ゐより。日本府を置て馭め給ひし時の古説ゐ。古典ゐ考へ合せて。安藤直彦ゐ令製ゝる大図あるを。今かく縮図せし免ゝり。精くは其大図ゐ就て見べし。


北方五狄
山戎
平北
幽薊
凌潢
孤竹
榆
營州
遼水
把婁
四十度
東勝
匈奴
并州
恒山
冀州
梁
勃海
兗州
青州
徐州
淄
萊
崑夷
眼水
淮陰
淮南
楊州
豫州
陶
定陶
荷沢
雷沢
大野
淮
汝
蔡
陪尾
隋
鄂
南巢
六
庐
歷
鍾
丹陽湖
九子
南江
中江
九江
東陵
三苗
茶鄉
梁水
郴
數淺原
麻姑
章貢
越
甬東
北極出地三十度
三十五度

肅慎
扶餘
長白山
朝鮮
京畿道
黄海道
忠清道
全羅道
慶尚道
大和国
新羅国
高麗国
筑紫島
無島
五島
永長郡
琉球
瓜島



東方句芒鳥身人面乘二兩龍。

郭注了。木神也。方面素服。墨子曰。昔秦穆公有明德。上帝使句芒賜之壽十九年と言ふ。禮記月令。孟春之月。其日甲乙。其

図面。經緯ノ線各五度。一度ハ皇国ノ里法三十里許リニ當ル。大概曲尺ノ四分ヲ以テ一度ト為ス。但シ經度ハ地球ノ體ニ倣ヘル故ニ南北廣狹アリテ。其国ノ位置ニ依リ。東西ノ里數均シカラズ。實ニハ線ヲ撓メテ地面ニ倣フベキ事ナレドモ。小図ニテハ大差ナケレバ。姑ク直線ヲ用ヒテ。製図ノ便ニ從ヒ。見ム人コノ意ヲ得テ。○ヲ記セルハ舊都。△ハ五表ノ目標ナリ。

帝太皞其神句芒。鄭玄云。此蒼精之君。木官之臣。自古以來。著德立功者也。太皞宓戲氏也。句芒少皞氏之子曰重。為木官者也。淮南ハ時則訓ホ。東方之極。自碣石山過朝鮮貫大人之國。東至日出之次。搏木之地。青土樹木之野。高誘云。搏木。搏桑。皆日所出之地也。太皞句芒之所司者万二千里。大皞伏羲氏。東方木德之帝也。句芒。木神。司地主也。

尚書大傳ヨ。東方之極。自碣石東至日出搏桑之野。大皞句芒司之ヲホど有ア。ホヲ本編高辛紀ホ云ふを見べし。ちて海外東經ハ全文ナリ。ホ竟ニナア。故上黒齒國の條ヲ說遺ニナる。湯谷扶桑の事ハ故も。復更ヲ論はむホ。彼ハ文ヨ。在黒齒北。居水中。有大木と云。ホハ。卽謂ゆる扶桑ホて。九日居下枝。一日居上枝と有ハ。例ハ繪詞ホて。彼十日と稱せる羲和の十子ハ。一人ハ上枝ヲ昇ア居し。九人ハ下枝ヲ昇り居ニナる圖の由あり。其ハまさ大荒東經ヲ。湯谷上有扶木。一日方至。一日方出。皆戴于烏。とも有ホ。ハ合せ考ふるホ。十子相代アテ。此高木ホ昇アて。身を暴せる圖象ヲて。此ハ沐浴ハ故實と聞えニナア。然るを郭注ヨ。羲和生十日。とある所ホハ。右の如く。十日を十子と說ケ。九日居下枝。一日居上枝と云ふ所ヲハ。傳曰。天有十日。日之數十。此ヲ云ふ。九日居下枝。一日居上枝。大荒東經ニ又云。一日方至。一日方出。云ふくとて。莊子淮南子を始め。諸書ヨ引て天日の十箇ある由を證し。廣注ま〻畢沅ガ注も同說ハ也ど皆非あり。天ヨ。眞の十日有むやも。殊ホ実の日象あらむヨハ。戴烏とは云ふくも非ず。人形ハアし故ヲ。かく云へり。文ヲよく心を於ケて辨ふべキ文あり。但しのく云ハ。日中有烏と云へる。旧ヨ俗說を引出ホ人も有むろ。其ハ三五本国考の末條ヨ。辨ふるを見て知べし。其ハ於淮南ハ天文訓ホ。日出于暘谷。浴于咸池。拂于扶桑。是謂晨明。登

于扶桑爰始將行と有ふ暘谷も。卽上の大壑甘淵湯谷ゐて。諸書ふ。或も陽。まゝ崵形ども作されど。共ゐ此谷れ名ふ用ひしは。易の義ゐれど。三字同音ふて。此も本編ふ委曲せる如く。天日れ始めて分判せる谷ゐ由緒ふ因ゐて。元易ふよゐて建し始まふ故の名ゐて。然れど海外東經ゐる湯谷の郭注ゐ谷中水熱也と云る。前ゐも何ぞや思ひれど。然も有べし。然て左太沖ゐ吳都賦ゐ經扶桑之中林包湯谷之滂沛とある注ゐ湯音陽と云へるは正義ゐり。然れど陽もゐや阜ゐ從ふ字ゐて。迂遠ゐれど。実ゐも暘湯ともゐ音易とこそ注べゝれ。謂ゐる陰陽の正字は。會易の字を用ふるゐ正しきこと。本編ゐ論ふ如ゐれどれり。斯て畢沅ゐ校正本ゐ見れど。虞書宅嵎夷曰暘谷。說文作暘。史記索隱云。史記旧本作湯谷。淮南子云。日出于咸池。按湯暘崵皆一也と云へるも。余と同意の說ゐて。けて日も暘谷ふ出て咸池ふ浴し。扶桑ゐ拂ふゆ云へるは。

天日れ此ゐ始めて分出せる古說と。彼十日の。扶桑暘谷ふ沐浴せる故事とを合せて。日くふ新ゐそれ谷ゐり。出行る趣ゐ章れせる文詞ゐて。然るも天日はしも。其生て始めれ天日。乃今れ天日ゐて。日くゐ新ふ生り出る物ゐも非ざふこと。神典の古傳ゐ。大地と成るべき物の中ゐより。葦形れどゆ萌騰れふ物ゐて。それ天日ゆ成れる由ゐふゐ。思ひ合せてかくも論ふゐり。近ゐ年ごろ何人ゐや。日月東湧地平図說といふ物を著して。日月共ゐ日くゐ大東洋中ゐより。新ゐ成出る物ゐる事れ。神代古說ゐ得て。蝦夷地四十度の所ゐて。慥ゐ実見せる由の說ゐりと聞て。予未其書を見ねど。暗ふ其說の妄ゐ察る。後生迷こゆれ。實ふは天日及び其大御神。ふれ御國ふも生坐せれゆ。大地を放て宇宙を照ゐ世と爲て。天日のもゆ生出し處とは云べゝ。ゆ。日くふ新ゐ此御國ゐて出とは云ふらゐ。然れど上古漢土ゐて東と号ゐし。扶木の在し地を

云ひ。其地を即皇国ゐて。実よも春氣是より発生して。万物を鼓動し。万国を育養れること。顕然されむ。日〻了此地より出ずと云むも。理あかき説とは云べからず。然れど博桑暘谷を。天日の出さる處と云ふ説のみ。眞に古傳の遺れるふて。十日に説を。別了一故事に混淆せる者ゐ成こと。三五本國考の末條ふ。委く辨明を成を以て知る可し。王充論衡了。儒者論曰。旦出扶桑暮入細柳。扶桑東方地。細柳西方野也。桑柳天地之際。日月常所出入之処。問曰。歳二月八月時日出正東。日入正西。可謂日出於扶桑入於細柳。今夏日長之時日出於東北入於西北。冬日短之時日出於東南入於西南。冬与夏日之出入在於四隅。扶桑細柳正在何所乎。所論之言猶謂春秋不上謂冬与夏也。と云る論に上了論へる古義を知ざる論あり。そは夏に東北より出で。冬に東南よ了出れど。春分秋分。これ東西の正位ゐれど。此を本として。東よ了出て西よ了入ると謂ふよ了。子細ゐき事ゐ成ずや。偖まさ天文訓了。暘谷咸池を二名を稱ゐれど。此も同所に異名ゐ了。

其を山海經了。湯谷了浴に也有るを。浴咸池と云へるふて著く。此は謂ゆる對文の格ゐ了其例を下ふ委曲よ論ふ如く。扶桑若木を同樹に異名ゐる成。楚辭離騒了。飲余馬於咸池兮。揔余轡乎扶桑。折若木拂日と文さる類ゐり。王逸ら注よ。咸池日浴處也。揔結也。扶桑日所拂木也。言我乃往至東極之野。飲馬於咸池与日俱浴。以潔己身。結我車轡於扶桑。以留日行。幸得不老延年。寿高大也と云へるに。能く叶へり。然るよ扶桑と若木を別木の如く説き。まさ折取若木。以拂擊日。使之還去也云ひ。或謂拂蔽也。以若木郭蔽日。使不得過也とも説き。淮南子に高誘注よ。拂猶過也と注せるゐど皆非ゐり。此を拂祓同韵了。実に扶桑を折取りて。已身の汚悪を祓除ゆる義ゐ成物をや。ゆて如此考へて後了。沐浴に二字ふふと心留めて。説文を檢る了。沐濯髮也。从水木聲。浴洒身也。从水谷聲とにみ有了。木ふ作り谷ふ作る

所以を注せず。茲に段玉裁が注に。沐字を引伸爲芟除之義。
如管子云沐樹之枝と云ひ。浴字を。老子浴神不死。河上公
曰。浴養也。夏小正黑鳥浴。浴也者。飛乍高乍下也。皆引伸之義
也と云へり。河上公注の老子。今本に也普遍れ如く。谷神不
死。谷養也とあり。其餘の諸本にも。浴神と作
さるをば未見及ぶ。故誣しむ人も有べけれど。段氏に妄
誕の人に非ず。さる本も有りしはこそ。此に本編に記せる
谷神玄牝。やゲて暘谷れりと云ふ。已の考
へにも叶ひて。由有ける本ありしし。今按ずるに。管子
に輕重篇にて。沐途菊之樹枝。使無尺寸之陰。まく沐涂樹之
枝也れど有りて。樹枝を伐拂ふ事れり。老子に。谷神を浴神
と作さる本の有るも。古へに水を从ざ旧も。浴と同音同義に
して故に錯れしにて。沐浴の二字ともに。扶桑暘谷に木谷

せ旧故事にて。起れる文字れるにと疑れし。然れど二字共
に水に从ふに。中くに後の狡意あり。大抵諸字に。謂ゆる會
意を以て扁を从しにて。本義を失ひさる類に。今數ふ旧に
暇ならば。上に謂へ旧湯暘暘暘れども。乃其一例と知べし。
然れど此に。今頓に臆断せる事あれど。他の字
書ぜもに。相類せる説の。有や無しや知ずし。はさ夏小正
と引さ旧は。其十月に文れ旧ば。黑鳥浴に三字その本文に
て。以下に戴氏が傳文にて。然るに此を阮元が補注本に一
本に黑鳥者何也。烏也。浴也者。飛乍高乍下也と有旧に正と
爲べし。然に有れど。飛乍高乍下也と云へるは。浴を翼の義に
取れるにて。甚じ非説あり。此に早く渡邊之望が。夏小正

埒解といふ書了。浴者。猶浴乎沂之浴。此言、時有鳥浴于水涯也。云へるを用ふ。居焉。与鳥魚游。審其四時。攄節所謂小春之際。種麥刈茅之時。藪沢溝洫之麋。往く有浴水之鳥。村童野老。見以為雨候也。嗚呼先王敬小之明。徴諸本邦今日而不繆矣。況其大者。庸得不畏敬乎哉。但是此等事。眞儒之所用心而以博雑一虚愚蒙以為禽犢書籠之所忽且大笑也。学者所須當査看也。諸ある言れり。ちて上代よりかく鳥浴は諺あるし。彼羲和の生める十日は子等ぐ。頭小鳥形を戴り。思ふ了。事も此鳥は浴小效牙。古儀の圖象ある。其は鳥は浴して後。かれら翼小栖て。翼を伸べ干は物ある。前は。鳥浴今も雨候とされば形て。頭は鳥形を作り戴き。木谷して雨を祈れる図象ある。其を大荒東経了。黄帝の應龍を使ひて。蚩尤を殺せる事を記せる文中は。旱為て應龍之狀乃得大雨と有り。其郭注了。今之土龍。本此氣應自然冥感。非人

所能為也と云。所は。神農氏の。祈雨止雨法は思ひ合せて。方拠了かゝるぞ。神聖の道ある事をも知べしと。書ありしろど。今按へで然る儀。然らば其大壑。甘淵。暘谷をまゝ咸池とも。別ありけ了。毛云ひし義は如何と云ふ。池は初學記了。此谷は事を曰。天池。一曰。朝夕池。亦云大壑巨壑と有る池ふて。地字と共了女会は義ある。咸は感と通じて。易は澤山咸の咸小同く。交咸の義ある了。謂ある暘谷咸池。やがて大地は会門彩ふが故小地字を作ふは。土了女会の象形さる。也を合せて彫れるおと。説文解字を見て知べし。然れば池。其を續字まゝ。女会ま因れる字ある。謂ふも更あり。博物志は古説了。子曰。乾動直。静專。坤動開。静翕。其根也天根。毎日兩度。蹴入尾閭巨壑。則海沸出潮と有る如く。天日ふ了降る玄牡の氣勢は。毎日兩度咸入して。天易地会は構精あ

ア潮汐をれ玄池ある由れ名あア。是を以て黄帝書ふ。ふ子
玄牝之門。天地根と云アア。然るは天地と分れし会門あ主
ばあわ。抑和漢の古傳ま。天地の初めま。一ツ物大空ま生れり
地とま分れしま。天地初分と云へア。是を以て天日を常ま
玄牝の象を建し。大地は常まその氣勢ま玄牝ア受く。天地
の橐籥に と謂ふを是あり。此ア資わて万。然るふ其玄牝天
物れ生成あり。これ会易構精の大意あり。
根。まま時くふ。女人の会ア感ぶる事ア。彼阿具沼ア畫窠
しふ。賤女。まま少昊顓頊あぞれ母ふ。ちふ感ぜし。耀光虹
れ如しと云ふ物玄れ。ちち是あア。但これ玄牝玄牡れ精義
地の実理ア仰觀俯察して。細密ア考へさる説有れど。其を
今ちふ。其百中一ま云ふ。然れぞ斯計りの端
緒ありとも。説ア交てを心得ぐされ事ア。如此を記し
於委く其義を探孫むと思はぐ。古史傳の天地初発れ條ぐ。

まま禊祓の條と。赤縣太古傳の
三皇紀とを合せ見て知るべし。黄帝れ樂名を咸池と稱ひ
しも。是池の名ふ。出さア。然れど唐堯の樂名ま。大咸ぞ云
アふも。此義ある事知べし。然ふま周礼大司樂。大咸の鄭注
ふ。咸皆池。池施也。言堯德無所不施せ と。大咸咸池堯樂也と有る孔疏
云へるを。都ま故実を辨へざる説れり。
ぢて。此咸池暘谷。や
ぢて速鞆れ湍門ふて。神典ア謂ひふ速吸門ふるわ就て思
ふア。此ふわや。西方。筑前國れ北面ある。玄界洋ちふ邊ま。
伊邪那岐大神の。禊身ませふ橘小戸ふり。抑大神。ちくわて
祓除を爲給アれど。其初ア速吸門を見給ふま。潮太く急し
とて。橘小戸ア。祓し給へる我思ふア。其汚悪を。謂ひる大
壑無底之谷さふ。速吸門ふわ。根國へ祓ひ給はむとの御事

ふて。畏りれど。此時生坐ふる日神月神の御初浴し給ひしも。決定て此端門ならむや推察らる。是事れ精説。まさ此ノ記の段と。太古傳の三皇紀とよ。しがさし古史傳の御禊注せるを合せ見て知べし。然ま神世よ神等れ御禊を。大かゝ比水門ふてぞ爲給ひりむ。故その由緒ノよりて。姫嶋よ住める義和。まゝ其産め所子等を。常ふこれ谷ふて。浴せし事とふそ想ちるれ。偖ちう惟ひ續くれむ。前ノ顙頂の大壑ふ。其琴瑟を棄さ正や有るも。謂ゆる祓具よ棄さ所ふて。是はさ大神れ御身ふ附給ひし物ども。皆ふ〳〵ふ棄給ひし例を傳へし態ノるふを知ばし。然らむ彼國の。沐浴禊祓ふやの所爲さ牙ふ。皇國ノ習へる事ふぞ有りる。其れ説文を始め字書どもよ。祓除悪祭也。从示戈。邑徐曰。按祓之爲言拂也。除災求福。又絜也。又除也と云ひ。禊はもと潔字ふて。臨水祓除也。ふやぞ有るを見て知べし。皇国の身潔祓除れ有趣ノ異ること無く聞えゝり。○因ノ記に。我ゞ漢風の号子大壑と称に る事を。二十二三戈の時ふりき。一日ふと。莊子の天地篇を披きりるノ。東ふ大壑やいふ谷ある由。よて。夫大壑之爲物也。注焉而不滿。酌焉而不竭。吾將遊焉。と云へ所文を見て。面白く覚え。其頃漢学を專とせし時ふれむ。深き思慮もれく。古を号とふて。物よも記し。印ふも作りて在りるよ。十年ばゝり前より。大壑やゞて玄牝之門。暘谷。咸池。百谷王ふる事ふ知アゝるゞ。近頃まゝ神典れる。速吸門さる事を知り得て。其やごと無き所ふ所を思妙ノ。随き拙き已ゞ号ふ称へむ事は。畏く僭上れる事とは思へど。年來用ひ來りし号れるノ せむ方ふく。仍是号子用ふるを。元こを不意ノ出ゝる事よし有れむ。見む人其罪を恕し給へや。

偖かれ扶桑大樹れ。彼土の海外東方ふる事を。諸書の説符合して。異論ある事れし。其を楚辭東君歌ふ。暾將出兮東方。王逸注謂。日始出東方。其容暾暾而盛大也。照吾檻兮扶桑。吾謂

白也・檻、楯也・言東方有扶桑之木・其高万仞・日下浴於湯谷・上拂其扶桑・爰始而登・照曜四方・日以扶桑為舍檻・故曰照吾檻兮扶桑・撫余馬兮安驅云々。東君とは即日を稱ひ。まさ上ゥも引さる離騷ふ。飲余馬於咸池兮。咸池、日浴処也・摠余轡乎扶桑。摠、結也・扶桑、日所拂木也・折若木以拂日兮云々。哀時命ふ。左袪、挂於博桑。右袪、拂於不周兮云々。れぞあり。不周、西極之山名あり・委くは天柱五岳考ふ説くを見るべし・此文を西極の不周山と・東極の扶桑とを對して・道德の盛大ゥして・包ざる所なきを比へさるあひ。呂氏春秋求人篇ふ。禹東至博木之地・爲欲篇ふ。北至大夏・南至北戸・西至三危・東至扶桑・不敢亂矣。高誘注・乱、猶離也・淮南子天文訓ふ。日出于暘谷・浴于咸池・拂于扶桑・是謂晨明。暘谷、湯谷あり・咸池とは上ゥ引る離騷の辞ゥ合せて思ひで・暘谷の一名ふるを・出于暘谷・浴于咸池と云へるは・上ゥ云へる如く互文あひ。登于扶桑。爰始將行。是謂朏明。至于曲阿。是謂旦明云々。高誘云く・朏明、將明也・旦明、平旦也と云へり・地形訓ゥ。世界は大九州の名ゥ出せる所ゥ。正東、陽州曰申土。ぞ見え。扶木、在陽州日之所。曬とも登保之山。暘谷博桑。在東方。高誘注ふ。暘谷、日之所出也。博桑、在登保之山。東北方也とも有ゆて論ひ無し。漢以來れ詩賦の類ゥ・此名の出さる。今計ふるふ暇あらぞ・其れ文選ゥどを見ても知るべし。けて其博桑は字義は。許慎ゥ說文解字。木部ふ。博ゥ。博桑、神木。日所出也。從木專聲。段玉裁云・叒下曰・日初出東方湯谷・所登博桑、叒木也・然則博桑、即叒木也・東下曰・從日在木中・杲下曰・從日在木上・皆謂博木也・淮南子高注亦曰・博桑、日所出也・同部ふ扶。扶疏四布也。從木夫聲。段注・扶汲古刊本從手非也・今依玉篇五音韵譜・集韵類篇正・扶之言扶也・古書多作扶疏・同音假借也・上林賦・垂條扶疏・劉向傳・梓樹生枝葉扶

疏上出屋揚雄傳枝葉扶疏呂覽樹肥無使扶疏是則扶疏謂大木枝柯四布疏通作胥亦作蘇鄭風山有扶蘇毛曰扶蘇扶胥木也云〻。也見え扶榑ともふ。徐鍇が音註よ。防無切と有ア。然れど諸書ふ扶字を書ゐ故た。假借ふて正からず。凡て扶字ふ改むぢきあア。扶た説文ゴ佐也从手夫声と有りて是も防無切あり。故さ同書ふ。扶日初出東方湯谷所登榑桑。扶木也。段注按當云扶木榑桑也。日初出東方湯谷所登也上榑桑已見木部此処立文當如是離騷總余轡乎扶桑折若木以拂日二語相聯蓋若木即謂扶桑扶若字即榑扶字也。象形。枝葉蔽翳。凡扶之屬皆从扶と見え。徐鍇が音註ゴ。而灼切と言ひ。まゝ通釈ゴ。扶木ハ即榑桑十州記説榑桑兩〻相扶故从三又象桑之婀娜也爾雅注曰婀娜垂條也此又不音右直象形耳東方木德故有神桑耳略切と云へゆ。桑を蠶所食葉木。从扶木と見え。徐鍇ゴ通釋ふ。異於東方自然之神木。加木以別之自然扶字。象形而簡也。斯郎反と云へア。段注ふた榑桑者桑之長也故字从扶也息郎切と云へり。此等ハ説よ依れば。扶榑ともふ其音夫あア。扶桑扶桑ハ。もと扶を書ア。其音は而灼切ふて若あれば。扶桑ハフジャクと唱ふべき歟。フサウと唱ふ故た。桑字を書よア起れる後ハ訛音あア。桑を通釋ゴ斯郎反と有れど。音サウ切ゴど。其ハ蠶ハ食ふ。常の桑樹ふ用ふる時こそ有れ。榑桑と熟字せる桑をば。古へふ從りて。ジャクと唱ふべきふと著明あア。古今韵會ふ。若字ハ所ゴ。若木ハ東海木名也と見え。説文の段注よも。若木ハ即謂扶桑扶若字即榑扶字也と有り字彙よも。扶を而灼切音若日初東方暘谷所登榑桑扶木也と云ひ。若字の註ゴ。音弱若木木名あど有り。上ふ引さる説文及び通釈と思ひ合せ音若ある故ハ中村蘭林の学山録ゴ。楊愼が答李仁史書

を引きて日之為字有人忍任日是其四邑其音若音熱是其切響音若日生於若木故毛詩之音叶之音熱者日本陽類而影炎故楚辭之音叶之今楚南方言猶呼日頭為熱頭是其證也と見せ あゐ音ジヤク又セツなるべきこと諦よ考へ得さり其中は草の初生草芽の萌出ふ負ひして生肯出申蓂若あど皆此字よ因りて製れるあり其は豫て承ぎたれる字書を作らむ時ゆ云べし ちなみ桑木即搏桑也ぞ有ぎ同木あふこと論ひあきを山海經淮南子ゆどゆ東海は扶桑ぞは別ゆ若木ぞ名くる樹は有るは所以ある事あり其は尸子ゆ大木之奇靈者爲若とも木食之人多爲仁者名爲若木とも有りて東方は眞若木の奇靈ゆふより他木の奇靈ゆふよも然は名けしあり尸子は全書は早く亡びさり今引く文は山海經の郭注よ引さるを再引さるあり然るは山海經大荒北經ゆ大荒之中有衡石山上有赤樹青葉赤

華名曰若木西山經ゆ多搖木之有若ゆど有ふは是あり大荒北經の文意は赤樹ぞいふ木あり青葉赤華あるゆ若木よ似さる故ゆ若木と名くと云へりぞ聞え西山經の文意は搖木の奇靈ゆして若木の如きゆ多し と云へる意と聞えさり其は郭璞注ゆ右よ挙さる尸子の文を引きて此は共ゆ眞は若木あら孫ど若木ぞ名りさる趣よ説さるをも思ひ合はべし まゝ海内經よ南海之内黑水青水之間有木名曰若木若水出焉と有るも彼國の海内南方あれば眞若木小非ば此は晉は稽含ゆ南方草木狀ゆ朱槿花莖葉皆如桑葉光而厚樹高止四五尺而其花深紅色五出大如蜀葵云〻と有る樹は本草綱目小扶桑とも名くぞ李時珍ゆ言ふは疑ひく此樹は此木何頃よりか皇国よも渡りて鉢植あど ゆ作りて人は見る物あふゆ朝開暮落の花ふて木槿ぞ云ふ木の類あるゆ雲木れど云べき樹ゆ非ぞ まさ甚く寒氣

を恐ふ木あり。まゝ淮南子地形訓。南方荒外に所ふ。若木、在建木西末有十日。其華照下地と有ふに。眞の若木は扶桑あるを。はゝ凡て大樹の奇靈ある故。若木とも云よりて。其眞物ならぬ若木ゑ。扶桑に形狀ゑ混雜しふふあり。其に末有十日ゑ云へるゑ。扶桑ふ謂ゆふ說ゑ以て辨ふべし。但し末有十日と云ふふ事に上ふ伝へれど。猶三五本国考の末條ゑ謂ふまも見べし。ちて山海經ゑ右に記せるふより。若木扶桑ゑ異木に如く聞ゆる故ふ楚辭ふ摠余轡乎扶桑。竹若木以拂日と詠ぜるを始め。對句ふも作れる文章ども。に多ぢぞかし。其に彼阮籍ゑ詩ゑ。若木燿四海。賦ふ。扶桑臨于海上。若木照于崑崙。扶桑鬱瀛州ゑ云ひ。楊烱ゑ渾天国の書ゑも。扶桑略記ふ崇峻天皇元年。百濟より佛舍利を

献ずる時の表文を載せる中ふ。伏請陛下照佛日於若木之鄉。掩慈雲於扶桑之邑ゑ。然るに書等ふ。東海中ゑ。若木国と云ふ国ありと云ふ說の聞ゆるも。疑ふ。扶桑国に訛傳あり。ちて其扶桑神木。何所ふ在りしゑ云ふこと。後ふに知らず成ぬるゑど。上古ふ扶疏して在りし間に。彼國の地方より。能く見えゝふ故ゑ。其古傳は遺れるゑ。其に山海經東山經ふ。流沙三百里至于無皐之山。南望幼海。東望榑桑と有ふふ以ても辨ふ。但し此に直ふ彼国より見ゝる耳。あらず。世に初ふに。扶桑の地より。神眞ゝちの。多く往來ひて。故ふ。其語り傳へもはゝ遺れるふに。其由に三五本国考ふ論ふを見べし。彼國ふ。望放れゑ。天日は直ゑ。其神木ふ出るごと見えし故ゑ。右の如く傳ゑ。まゝ東呆杳ゑど此字も。此木ふ依ゆて制れるふ。其に說文ふ。東動也。從木。

官溥説從日在木中ゆゑ見え。徐鍇が通釈は東方物所甲坼萌動平秩東作故為動也と云へり。前漢歴志は東方東動也易氣動物於時為春と云ひ説文段注は木搏木也と云へり。黄帝本行記は注ふ。東者動也。日出万物乃動也。東字從日穿木以日出望之如穿扶桑之林木也ゑど有ア。韵會は東字の所は鄭氏曰木若木也日所升降在上曰杲在中曰東在下曰杳廣韵春方也ゑども云へり。はゝ杲字ふ。明也。从日在木上と云ひ杳字ふ。冥也。从日在木下と有る通釋は。按淮南子曰日出于暘谷拂于扶桑是謂晨明故東字日在木中登于扶桑是謂朏明故杲字日在木上詩曰杲杲出日也史記天官書曰日晡則反景上照于桑榆間故杳字日在木下也。ゆゑ云へはゝて知べし。諸字書どもは皆此説を取りて杲字を日出又明白也と註し杳字を冥也深也寛也寂也ゑど注せれど南西北の字は

は木は縁あ所説ある事ゆし。ちて本文は。湯谷上有扶桑有黒齒北ゆゑ有れは。扶桑ある域の下ふ。暘谷あア。黒齒まゝ其間ゑること著明ゑゆ。是を以て上は引る呂氏春秋は。東至博木之地青丘之鄉黒齒之國と有ると同じ事を。淮南子脩務訓ふ。東至黒齒ゆゑ云ひ。主術訓ふ。東至暘谷ゑゆゑ云へア。ゑゆ帝王世紀劉恕が外紀通鑑前編ゑど其餘はも彼此見えゝり。まゝ嶽瀆名山記ふ。扶桑山在東海中日之所出也と見え。大荒東經は。大荒之中有山名曰孽搖頵羝上有扶木柱三百里其葉如芥郭璞云柱猶起高也葉似芥葉有谷曰溫源谷と有ア。此文中ふ頵羝は字は孽搖ふ連称て四字の山名ゑる文或は孽搖のみ山名はて頵羝は別義ゑて誤字あるゝ心得ゆゑし説文は頵頭頵大也羝牡羊也と有り然れゆかの熊耳山牛頭山ゑどは例はて羊ふ似ゝる義を以て

四字名の山れらむも知らず。左ゐ右ゐ思ひ定め難れれむ。今姑く頽粗れ字をば用ひず。はゝ上ゐ引さ係地形訓の高誘注ゐ。榑木、在登保之山ゐ云へるを思ふゐ。榑桑木ゑ所在ゑ。我ゞ易州申土の一高山ゑ上ゐて。其山の名を孽摇山ゐ云も。登保山ゐ云も。扶桑山とも稱ひ。然て其山ゑ有る一州を。扶桑國と云へ係こゐ著く。から於其樹上ゐ。温源谷と名けし。上池も有アしと聞ゆるゑ。然る老大樹ゐし有れむ。然も有べき事あるゞ。其所在詳ゐら文。郭璞注ゐ。温源、即湯谷也。と云へるゑ非ゑアそゑ右の文。ま於孽摇といふ山ありて。其山上ゐ扶木ゐり。其扶木ゐ谷ゐありて。其名を温源といふ義ゐれむ。湯谷の海中ゐ在とは。元より別ゐるこゐ論を俟ゝ文。但し上池ゐ谷と云はむ事ゑいゐゞゐ思ふも有ぢれど。此国ゐ在りて。彼国より望める程の大樹ゐれむ。谷とも云べき上池の有るも。何ら疑はむ。上池とゑ。立木の空ゐ水ゑ湛へしゐ謂ふ語ゐり。温源と云へるゐ思へむ。其上池の水ゑ。温れりしと聞えゝゆ。上第四條ゐ引へる名山記ゑ文ゐ。東岳廣桑山、在東海中、青帝所都と有係山。そゑ名は相似ゝれど。此ゑ既ゐ云へる如く淤能碁呂嶋ゐて。東岳ゐ別山ゐアア。是を以て名山記ゐ。扶桑山ゐは別ゐ擧ゝアア。思ひ混ふぢらず。五岳ゑこと。漢土内ゐる泰山等の五岳を知りゝる人ゐし。実ゐ海外ゐるゞ。天皇太帝れ植給ひし眞五岳ゐて。彼国内ゐ謂ゆる五岳ゑ。擬五岳ゐり。其由委くは太古傳ゐ云へれど。其概略ゑ。天柱五岳考ゐも云べし。ちて其易州扶桑ゑ神域やゞて皇國ゐる由ゑ。其域ゐり渡アて彼國ゐ開闢し。其民ゐ教化せし神聖ゐちの功績ゐ。諸書ゐ參攷ゐ係ゐ。悉く我ゞ皇神ゐちゑ事迹ゐ符合しゐ於皇國ゐおゐて。然る神眞の本

州ある國を。南西北の三方を更ゐて。東方ゐも別ゐ有ることを無きを以て是ゐ知れて。こは三五本国考ゐ。其神聖さち。彼云ふ事れ。概略を述べ。斯て此神州の上古ゐ在りける趣を。東方るを見て悟るべし。此を彼神ゐ當ると朔ゐ十州記ゐ精ゐて。此人固ゐ仙風道骨の人ゐて。太上の眞官ゐる。谷希子といふ靈仙ゐ伴はるて。凡人れ得到ゐまじ。境界ゐも見廻り。まさ其師の語れ依古説をも聞集めて。十州記を錄せ依ゐし。本書ゐ自記せて。然るゐ後人れ加筆も往〻見えゐて。其を擇びて取る。次巻ゐ挙ぐる丈を。漢魏叢書。雲笈七籤。龍威秘書。列仙通紀ゐどゐ收さ依本ども。校合して挙さるゐ。谷希子を。第四條ゐ引ゐる。清靈眞人傳ゐ。東到ニ青丘一。遇ニ谷希子一と有る。皇国の神人ゐ。太古傳を見て知る依し。